



MONGOLIAN HERITACE

モンゴル帝国の遺産

最終発表

2024-12-07

第16期
インターゼミ(社会工学研究会)
アジアダイナミズム班

学部生 : 高、吉川
大学院生 : 阿達、禹、倉元、小柳、佐々木、
須貝、菅沼、杉、二本柳、山中、
佐藤

指導教員 : 金美徳、平石隆司

Agenda

1. 振り返り（2017年～2023年 論文のテーマ）
2. 研究目的・方法
3. 2024年度の研究テーマ
4. 研究対象
5. 研究結果
6. フィールドワーク
7. まとめ

1. 振り返り（2017年～2023年 論文のテーマ）

モンゴル帝国史の7年間の研究（今年で8年目！）

年度	タイトル	頁数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81
2023	モンゴル帝国の衰退から見る宗教と統治	89

659

2023年度はモンゴル帝国が衰退していく過程で、帝国の東と西でモンゴルの支配を覆した明とロシアに着目し、それぞれの権力の交代に宗教が大きな影響を与えたことを研究した

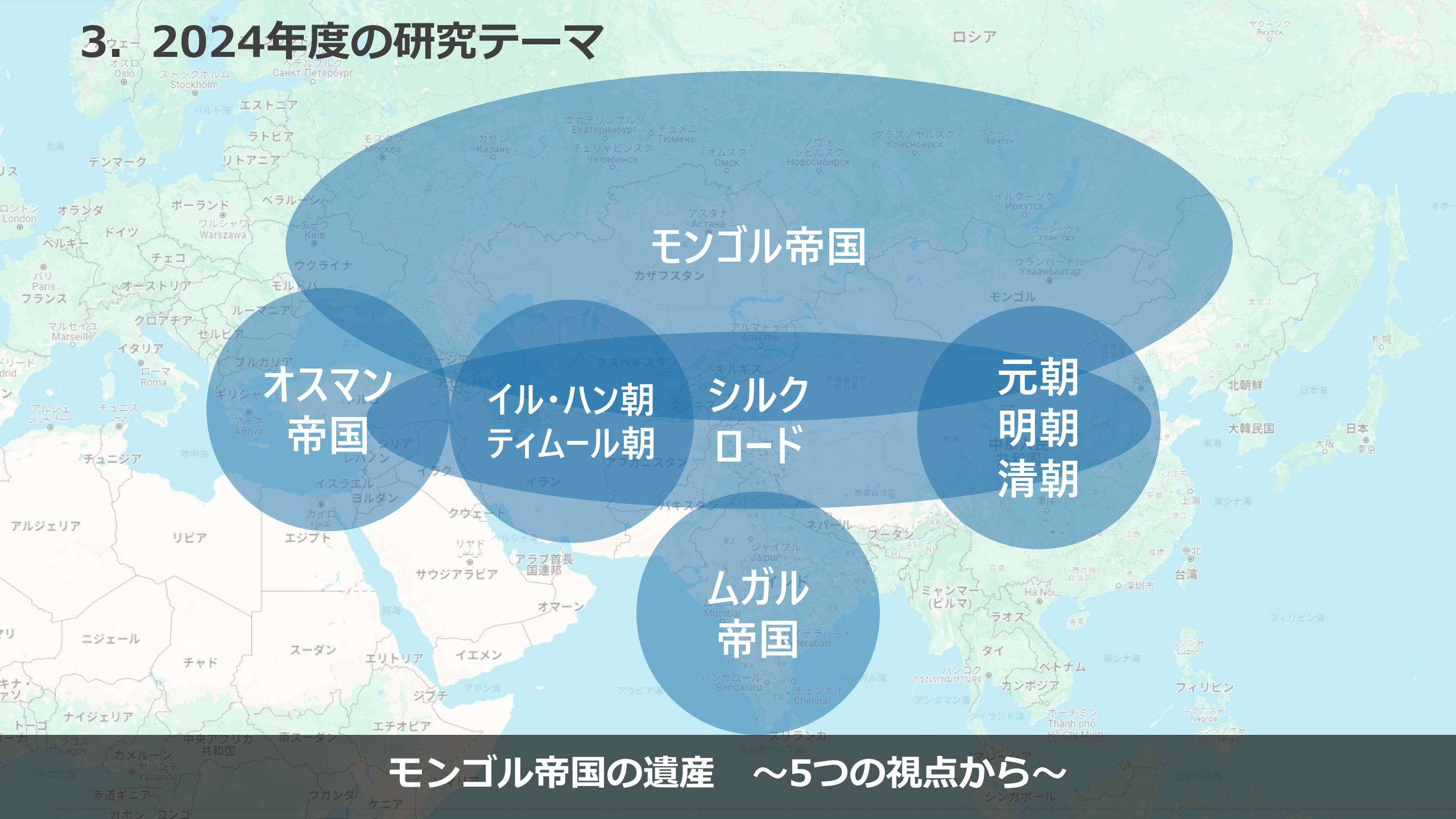
2017年度～2021年度の論文が書籍として出版された
(2023/3/30発売 全240頁)



2. 研究目的・方法

- ✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す
- ✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う
- ✓ フィールドワークは「**モンゴル大使館**」や「**専門研究者**」にヒアリングを行う

3. 2024年度の研究テーマ



モンゴル帝国

元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

オスマン
帝国

モンゴル帝国の遺産 ～5つの視点から～

4. 研究対象：歴史年表

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
8-13 世紀	1155年 チンギス・カンの誕生 1206年 チンギス・カン即位 モンゴル帝国建国 1227年 チンギス・カン死去 1260年 フビライ・カーン即位	960年 北宋建国 1126年 金が北宋を滅ぼす 1127年 南宋建国 1234年 モンゴルが金を滅ぼす 1271年 国号を元に改称 1279年 元が南宋を滅ぼす	1260年 チンギス・カンの孫のフレグが イル・ハン朝を建国		894年 遣唐使廃止 1185年 鎌倉幕府成立 1274年 文永の役 1281年 弘安の役
14-16 世紀	1368年 元がモンゴルに退く(北元) 1449年 オイラートのエセン・カン 明の英宗を捕虜に(土木の変) 1482年 韃靼ダヤン・カーン即位 1542年 韃靼アルタン・カーン即位	1368年 朱元璋が明を建国 1402年 永楽帝即位(靖難の変) 1405年 鄭和の大遠征開始 1572年 万暦帝即位	1353年 タガイ・テムルの死によりイル・ハン朝滅亡 1370年 ティムールがサマルカンド征服、 ティムール朝建国 1393年 バグダードを攻略 1398年 デリーへ遠征 1405年 明への遠征途中で死去 1501年 イスマーイール1世が サファヴィー朝建国 1507年 ティムール朝滅亡(モンゴル系の支配が終了) 1587年 サファヴィー朝アッバース1世即位	1483年 バーブルの誕生 1504年 バーブルがカーブルを征服 1526年 第1次パーニーパットの戦い ムガル帝国建国 1530年 バーブル死去 1556年 アクバル即位 1564年 シズヤ(人頭税)廃止	1338年 室町幕府成立 1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱 1587年 豊臣秀吉バテレン追放令
17-18 世紀		1616年 後金を建国(女真族ヌルハチ) 1636年 国号を清に改称(ホンタイジ) 1644年 清の中華支配開始 (李自成により明が滅亡、清の順治帝と摂政ドルゴン入関) 1662年 康熙帝即位 1689年 清とロシア：ネルチンスク条約を結び国境確定 1722年 雍正帝即位 1735年 乾隆帝即位 1759年 清、新疆を併合	1736年 サファヴィー朝滅亡 1796年 ガージャール朝建国	1600年 イギリス東インド会社設立 1605年 アクバル死去 1658年 シャー・ジャハーン：タージ・マハル完成 1679年 シズヤ(人頭税)復活 1757年 プラッシーの戦い	1603年 江戸幕府成立 1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令

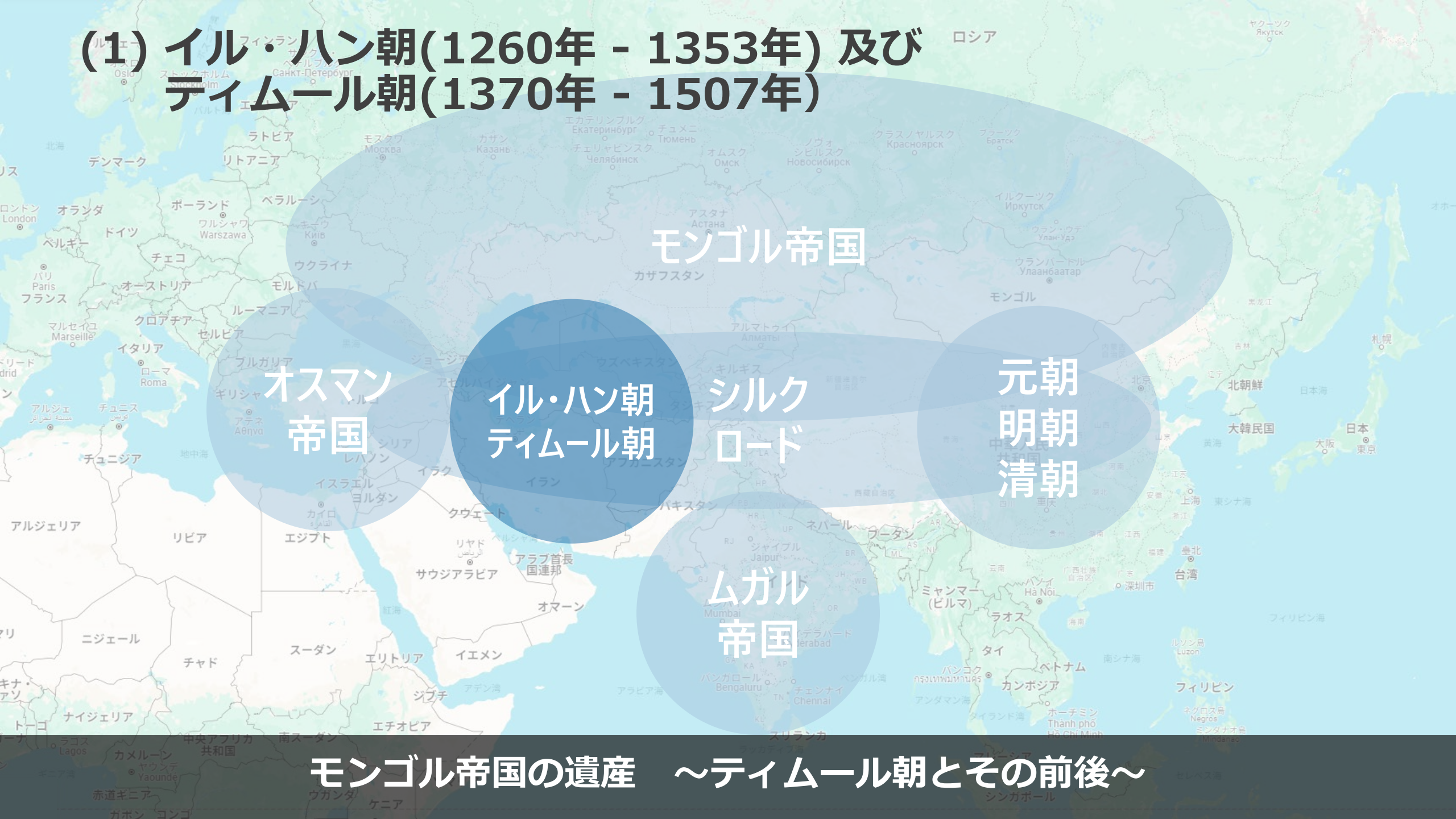
4. 研究対象：歴史年表

年代	モンゴル・北東アジア史	中国史	中央・西アジア史	インド史	日本史
19-20 世紀	1911年 ボグド・ハーン政権誕生 1924年 モンゴル人民共和国成立 1931年 満洲事変 1939年 ノモンハン事件	1840年 アヘン戦争勃発 1850年 太平天国の乱勃発 1874年 光緒帝即位、西太后摂政 1894年 日清戦争勃発 1911年 辛亥革命 1912年 清が滅亡 中華民国成立 1937年 盧溝橋事件（日中戦争勃発） 1947年 国共内戦勃発 1949年 中華人民共和国成立	1804年 第一次ロシア・ベルシャ戦争 1826年 第二次ロシア・ベルシャ戦争 1828年 トルコマンチャイ条約 1906-1911年 イラン立憲革命 1921年 コサック旅団のレザー・ハーンがクーデター 1925年 ハーンが皇帝に即位、パフラヴィー朝発足 1979年イラン革命によりパフラヴィー朝崩壊、イラン・イスラム共和国成立	1803年 第2次マラータ戦争勃発 1813年 茶以外のインド貿易の独占権廃棄 1817年 第3次マラータ戦争勃発 1853年 鉄道開通 1857年 インド大反乱（シパーヒーの反乱） ムガル帝国が事実上滅亡 1858年 イギリス東インド会社解散 インド帝国がイギリスの直接統治下に置かれる 1947年 インド・パキスタンがイギリスから独立 1950年 インド共和国が成立	1858年 米修好通商条約 1868年 明治維新 1894年 日清戦争勃発 1904年 日露戦争勃発 1910年 韓国併合 1941年 真珠湾攻撃(太平洋戦争勃発) 1945年 敗戦 1972年 日中国交正常化

5. 研究結果



(1) イル・ハン朝(1260年 - 1353年) 及び ティムール朝(1370年 - 1507年)



モンゴル帝国

オスマン
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

シルク
ロード

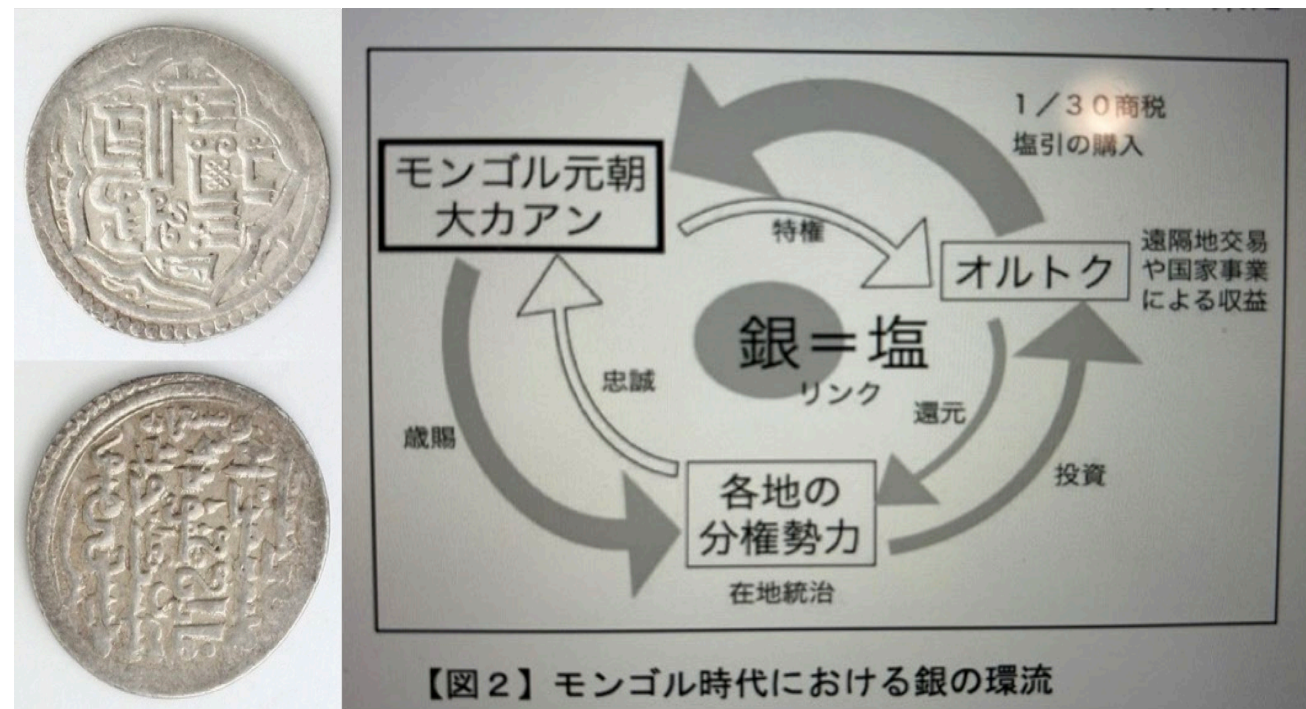
元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

モンゴル帝国の遺産 ～ティムール朝とその前後～

モンゴル帝国の遺産 ～イル・ハン朝とティムール朝に見るモンゴルの支配～

中央・西アジアは16世紀初頭までモンゴル系の政権が続き、モンゴル帝国流の統治が行われた



出所：ティアラインターナショナル

出所：愛媛大学教育学部紀要 第62巻 245～253

ティムール帝国の版図と現代のイラン(→はテヘラン)



出所：<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=45029224>

イラン地域の政権の推移

イル・ハン朝 (1260-1353年)

ティムール朝 (1370-1507年)

サファヴィー朝 (1501-1736年)

ガージャール朝 (1796-1925年)

モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システム変遷の考察

- ティムール朝は、通貨の銀、税制などモンゴル帝国の統治手法を受け継いだ
- 塩での税と取引券のシステムも引き継いだ。絹も追加し商業の活性化を狙った
- 遊牧民の軍事力と定住民による行政の統合をはかった

イラン地域のモンゴル系支配と、その影響

- イル・ハン、ティムールと続いたモンゴル系支配時代、広く芸術家や職人が集められ独自の融合文化が発展した
- ティムール朝後の非モンゴル政権でも十二支など一部でモンゴル流が受け継がれた
- 近代以降は、モンゴル支配の影響はほとんど残らなかった

ティムール朝：モンゴル帝国からティムール朝に至る統治システム変遷の考察

研究テーマ

- モンゴル帝国繁栄時の統治システム（行政、社会、経済）はどう形成され、ティムール朝では、どう継承されたのか考察する

研究結果概要

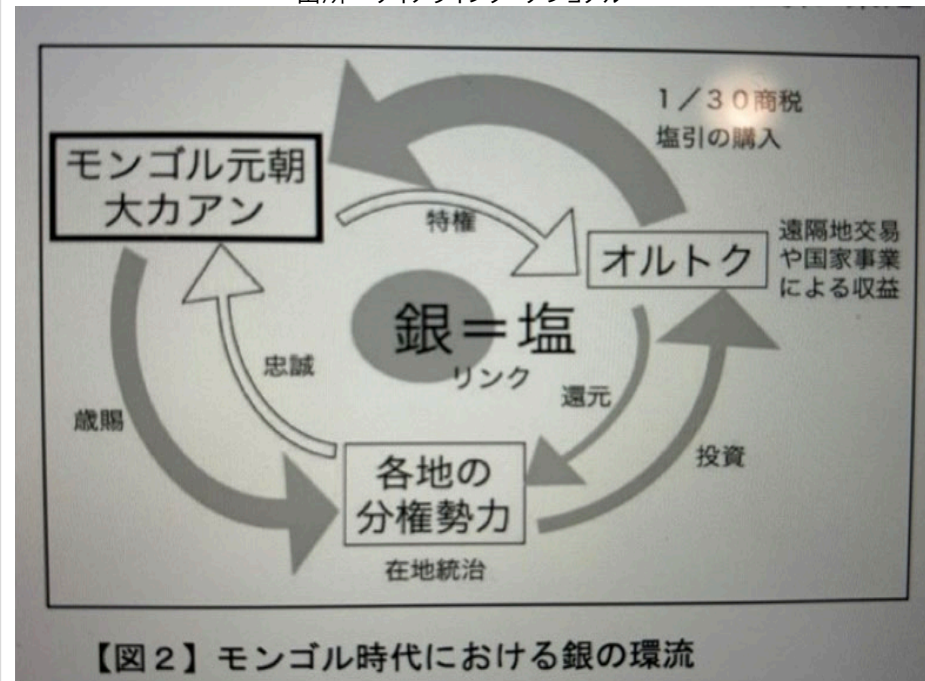
- ・モンゴル帝国では支配体制としてチンギス・カンに直隸するケシク（近衛軍団）が中央政府として存在し、両翼を千戸（ミンガン）グループを配置し、統治を進めた。
- ・千戸（ミンガン）は百騎、十騎と各長で構成され、遊牧民集団体制を敷いていた。
- ・モンゴル帝国では銀を共通の財貨とする徴税・財政体制であった。
- ・フビライ王朝時に塩を商業税として採用し、塩の取引券（塩引と呼び高額な紙幣の役目）を販売し、政府収入とした。主要都市、港を通過する際の通過税があったが、撤廃し、物流を促進し、交通網を整備・維持する。
- ・ティムール朝では塩にさらに絹を追加し商業、経済発展に繋げる

結論：モンゴルの遺産

- ✓ティムール朝は、モンゴル帝国の税制のいくつかの側面を引き継ぎ、特に帝国の安定と財政を強化するために、土地の収穫高に基づく地租（ハラージュ）や、都市部の商業活動に対する税を導入し、税制を改革。
- ✓ティムール朝は、遊牧民の伝統的な軍事力と定住社会の行政機構の統合を進める。
- ✓紙幣としての塩の取引券価値が下がった際、塩や紙幣の価値低下は、商業と経済に深刻な影響を与え、経済的混乱が社会不安を助長し政権の寿命に影響を及ぼすことになった。



出所：ティアラインターナショナル



出所：愛媛大学教育学部紀要 第62巻 245～253

イル・ハン朝とティムール朝: イラン地域のモンゴル系支配と、その影響

研究テーマ

- 現代のイランとその周辺は、イル・ハン朝、次いでティムール朝とモンゴル系が支配した。モンゴル支配はイラン地域にどのような影響を残し、残さなかったか

研究結果概要

- ・イル・ハン朝、ティムール朝ではペルシア系の官僚や大臣が多く活躍し、モンゴル系為政者はペルシアの知識や技術を活用し共存した。モンゴル帝国と共通する
- ・イル・ハンのガザルやティムールは各地から職人や芸術家を都に集め、ペルシア語歴史書、建築や学校など独自の融合イスラム文化が発展
- ・サファヴィー朝はモンゴル系ではない定住民の宗教団体から発展したが、遊牧民系部族が軍事面を支え、ペルシャ語を使う都市民が行政面を担当する構造はそれ以前のモンゴル系政権と共通。行政文書で十二支の使用や、王の尊称「シャー」、地域の呼び名「イラン」はイル・ハン朝から取り入れたもの。
- ・一方、イスラム教シーア派(十二イマーム派)を国教と定め、王宮を建てて即位式や祭祀を行うなど、遊牧文化から定住文化へ徐々に変化していった。サファヴィー朝は現代のイランの基を作ったとされる
- ・近代以降は、モンゴル支配は過去の歴史の一部と認識され影響はほとんど残らず。19世紀に入り英仏露など列強との不平等条約や列強間の駆け引きに翻弄された

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 13-16世紀のイラン地域では、モンゴル系の支配の下でペルシア系の大臣や官僚が活躍した構造がモンゴル帝国と共通する。その後も十二支や王の尊称が受け継がれた
- ✓ 東西の交通の要衝でもあるイラン地域では、モンゴル系支配時代に広く芸術家や職人が集められ、独自の融合文化が発展した
- ✓ 近代以降は、モンゴル支配の影響はほとんど残らなかった

ティムール帝国の版図と現代のイラン(→はテヘラン)



出所:<https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=45029224>

イラン地域の政権の推移

イル・ハン朝 (1260-1353年)



ティムール朝 (1370-1507年)

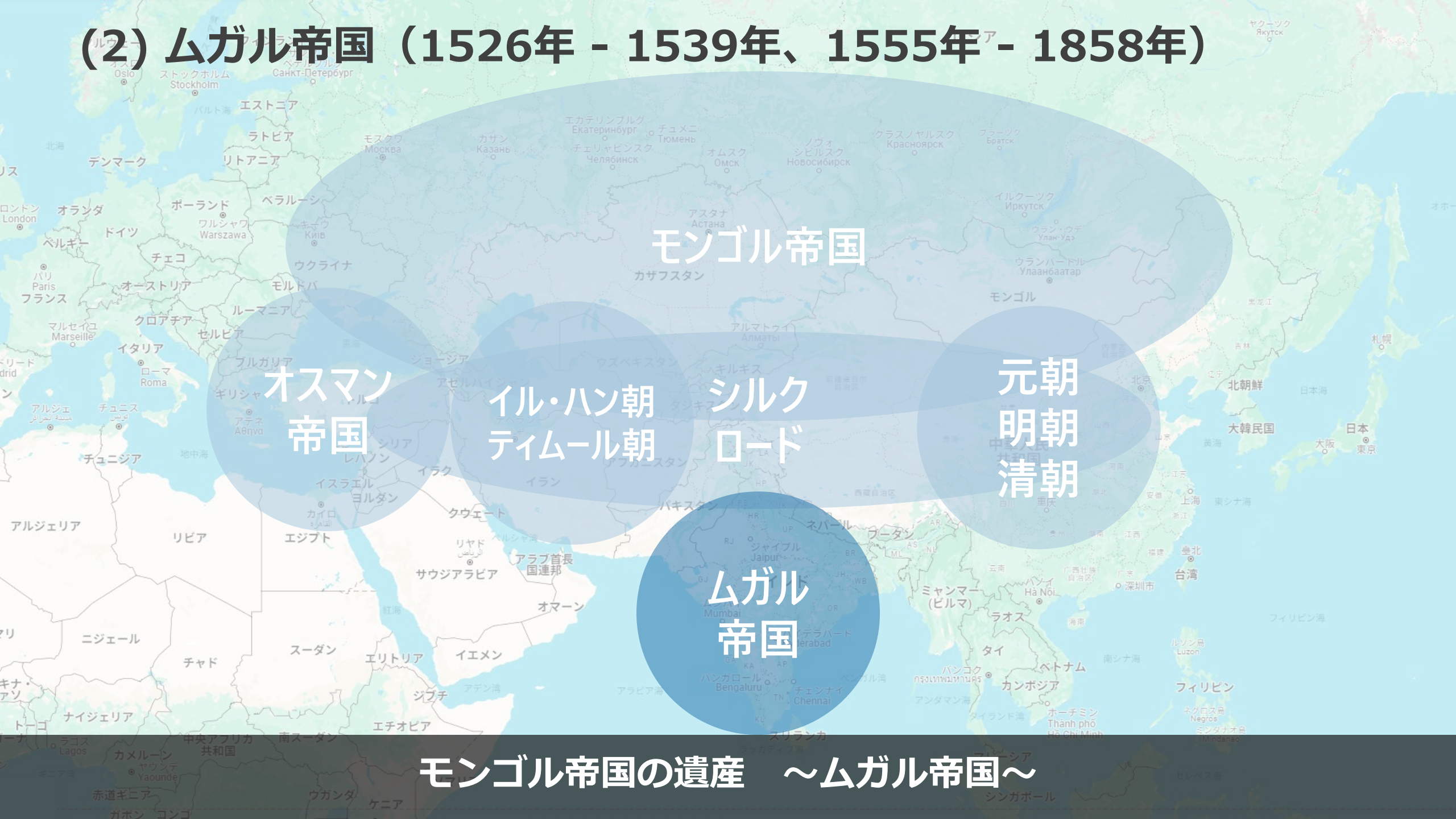


サファヴィー朝 (1501-1736年)



ガージャール朝 (1796-1925年)

(2) ムガル帝国 (1526年 - 1539年、1555年 - 1858年)



モンゴル帝国

オスマン
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

シルク
ロード

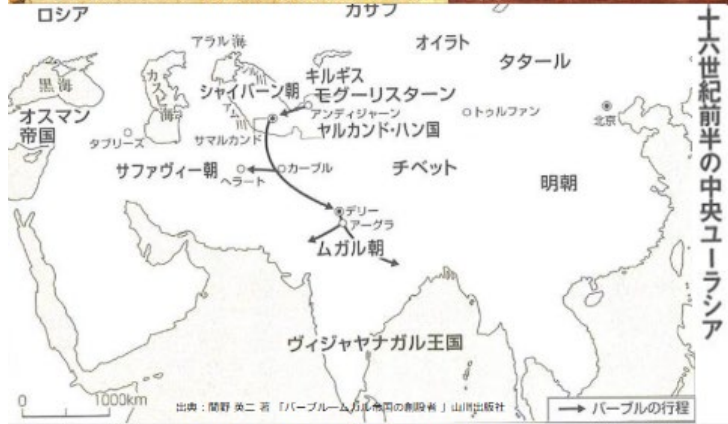
元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

モンゴル帝国の遺産 ～ムガル帝国～

モンゴル帝国の遺産 ～ムガル帝国～

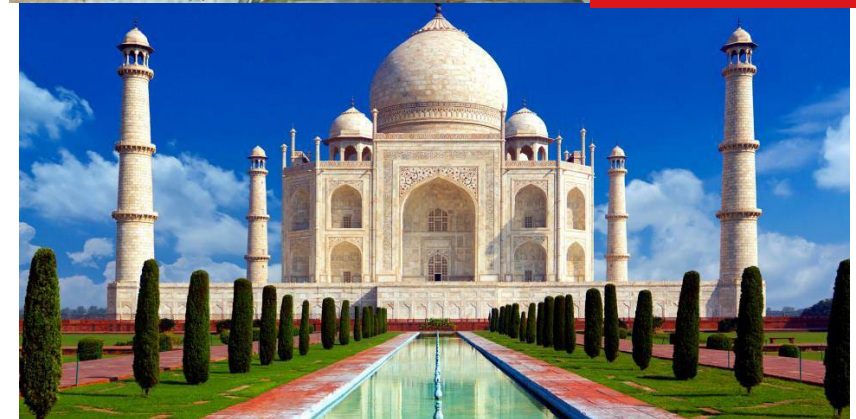
ムガル帝国は、モンゴル帝国の統治システムや軍事技術を基盤としながらも、チンギス・ハン(母方)よりティムール(父方)の血統を大切にし、イスラム文化とインドの伝統を融合させた独特の文明を築いた



3代目アクバル帝



6代目アウラングゼーブ帝



ムガル帝国創設者・バーブルからみるインドとモンゴル帝国の考察

- ・ 回想録は中央アジア遊牧民族出身の傑作として継承
- ・ インド侵攻のモンゴル帝国の踏襲はティムールの影響
- ・ ムガル帝国の名称は英雄の子孫という後世の概念表明

宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退

- ・ 帝国には多様な人を受け入れる宗教的寛容性が重要
- ・ より厳格なイスラム政策が多様な帝国を衰退させた
- ・ 非ムスリムに寛容的な政策が支配能力を喪失させたか

モンゴル帝国がムガル帝国（インド）に与えた影響

- ・ 多様な人を受け入れる文化が帝国を反映
- ・ 大規模帝国の維持の難しさ、長期戦争による衰退
- ・ 第3の隣国としてのインド(文化的、精神的、政治的)

ムガル帝国：ムガル帝国創設者・バーブルからみるインドとモンゴル帝国の考察

研究テーマ

- ムガル帝国の創設者・バーブルに焦点をあて、なぜインドを征服したのか、モンゴル帝国の影響は受けていたのか、受けていたとすればムガル帝国創設と影響の関係性は何かを探る。

研究結果概要

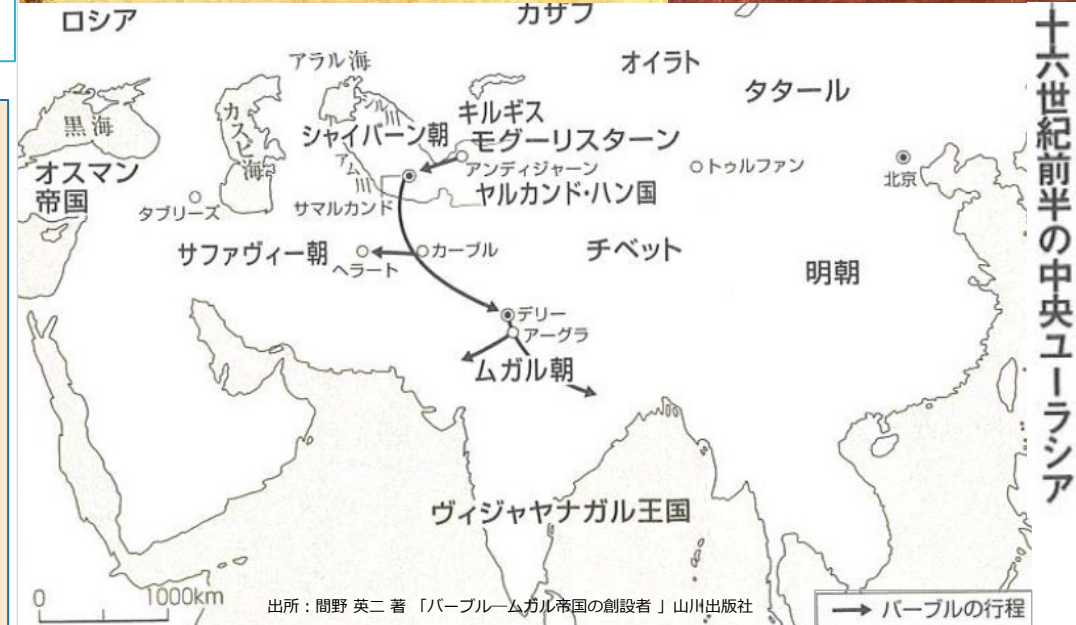
- ・バーブルが残した回想録『バーブル・ナーマ』には、恋愛や敵愾心といった心情、飲酒などの秘すべき体験を率直に綴っているほか、当時の政治、経済、社会、文化、活動拠点の地理的状況も記述されている。
- ・バーブルは政治的手腕、軍事的才能、人道的倫理性、文化的影響力がある人物であると分かる。
- ・長所が少ないと評価したインドへの侵攻理由には、経済的、潜在的豊かであることから当初は略奪目的だったが、中央アジアの拠点を追われ新たな拠点が必要だったこと、インド側（ローディー朝）のイスラーム教徒から支援要請があったこと、ティムールの遺産の再興を意識した可能性があったと考えられる。
- ・切った敵の首を漆喰で固めた「首の塔」による征服の見せしめなど、チンギス・カンやティムールといった祖先たちの伝統的な制圧方法を自然に取り入れていた。
- ・ムガルはモンゴルを表すが、ムガル朝集団を指すのみでなく、種族にかかわらず北西高地からの侵入者全般について北インドの住民が用いた他称であり、ムガル帝国が成立した時代の北インドは、モンゴルやチンギス・カン家との系脈の繋がりが尊重される中央アジアのような社会環境ではなかった。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 「首の塔」などのモンゴル帝國的支配の方法の踏襲は、モンゴル帝国の直接的な影響ではなく、ティムール朝から無意識に伝統として引き継がれたものであった。
- ✓ バーブルの回想録『バーブル・ナーマ』は、中央アジア遊牧民族出身の君主が残した稀有の回想録で、チンギス・カンとティムールの末裔によるインド征服のエピソードとして世界に傑作として残った。
- ✓ ムガルという名称は、北インドの住民が用いた北西高地からの侵入者全般についての他称であり、ムガル朝そのものやモンゴル人の帝国という意味は持たないが、偶然にも後世ではモンゴル帝国との関連を連想させるものとして定着した。名称は用いた者たちの概念表明であり、ムガル帝国はモンゴル帝国の子孫による建国という概念であることを示す。



出所：間野 英二 著「バーブル・ムガル帝国の創設者」山川出版社



出所：間野 英二 著「バーブル・ムガル帝国の創設者」山川出版社

ムガル帝国：宗教政策から見るムガル帝国の繁栄と衰退

研究テーマ

- ムガル帝国の宗教政策とは何だったのか。それは指導者によってどのような違いがあったのか。

研究結果概要

- ムガル帝国3代皇帝のアクバル帝はジズヤ(人頭税)の廃止、自らヒンドゥー教徒の王女と結婚し、ヒンドゥー教徒でも高級官僚や将軍に任命するなど、融和政策を行い、イスラーム教・ヒンドゥー教の宗教的対立を超えた新しい「神の宗教」(ディーネ=イラーヒー)を自ら説き、インドの統一的統治権を実現しようとした。
- ムガル帝国6代目皇帝のアウラングゼーブ帝は、アクバル帝の融和政策を放棄し、イスラーム教の立場を明確にしジズヤを復活させ、ヒンドゥー寺院のモスクへの建て替えなどを強行し、それに反発したヒンドゥー教徒に対する弾圧を行った。また、ムスリムに対しては価格の2.5%、ヒンドゥー教徒に対しては5%かけられていた物品入市税をムスリムにだけ免除した。
- 非融和的な政策は非ムスリムから反感を買い、マラーター王国やシク教などの勢力が反旗を翻した。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 結果的に融和政策をとったアクバル帝はムガル帝国を繁栄させ、非融和政策を行ったアウラングゼーブ帝は結果的にムガル帝国を衰退させた事から、融和政策を正しいと見て良いのか。むしろ非ムスリムに寛容的な政策が支配能力の喪失を起こし、ムガル帝国の衰退を招いたのではないのか
- ✓ イスラム帝国はイスラム法を広めイスラム法による統治によって秩序を安定させてきたが、ムガル帝国ではそれが出来なかったため、秩序が不安定になった。



3代目アクバル帝



6代目アウラングゼーブ帝

ムガル帝国: モンゴル帝国がムガル帝国（インド）に与えた影響

研究テーマ

- モンゴル帝国からムガル帝国を経由し現代のインドに与えた影響はどのようなものか？宗教的、政治的、文化的な視点から研究を行う

研究結果概要

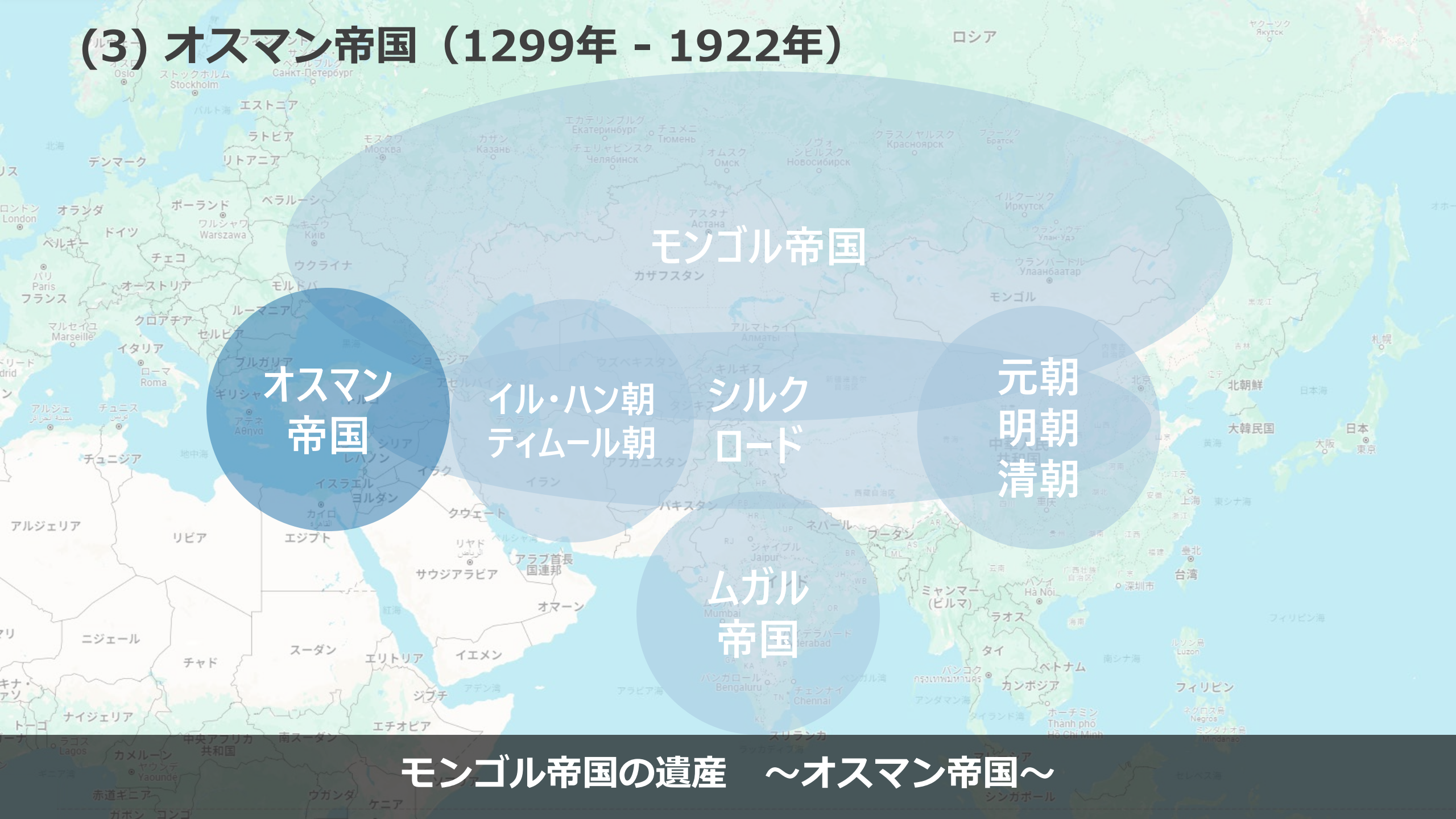
- ・モンゴル帝国とムガル帝国の宗教的寛容性
- ・モンゴル帝国の統治システムが現代インドの国家形成に与えた影響
- ・タージ・マハルから見る文化的融合
- ・ムガル帝国の衰退から見る現代インドへの系譜
- ・ソヨンボ文字から見るインドがモンゴルへ与えた影響

結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国とムガル帝国に共通する多様な人を受け入れる文化(宗教的寛容性)が帝国を反映させた
- ✓ ティムールの血統がムガル帝国の統治の正統性の源泉として重要視され、統治の実践や軍事戦略への影響があった
- ✓ モンゴル帝国が支配したペルシャから、建築知識の要素が広まりムガル建築(タージ・マハル)に影響を与えた
- ✓ 長期の戦争による財政負担、過度の課税、そして国際貿易の変化により、帝国の経済基盤が揺らいだ
- ✓ インドとモンゴルの間の文化的、精神的、政治的な相互影響がある



(3) オスマン帝国 (1299年 - 1922年)



モンゴル帝国

オスマン
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

シルク
ロード

元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

モンゴル帝国の遺産 ~オスマン帝国~

モンゴル帝国の遺産 ～オスマン帝国～

オスマン帝国は600年以上も世界の中心であり続けた。オスマン帝国の在り方は、住民の均質化をめざすのではなく、必要とされる能力を持った人々を、その文化的背景にかかわらず活用する柔軟い専制と、強靱な経済・軍事力、その両方を支えたのは海運の存在があった。

1. 広大な領土



2. オスマン帝国の大砲



3. 大航海時代の幕開け



4. ダイバーシティ国家(人種、宗教、職種)

人種・民族	宗教	主な職種
トルコ人	イスラム教 (スンニ派)	スルタン、パシヤ、ウラマー、軍指導者、官僚
アラブ人	イスラム教 (スンニ派)	学者、医師、商人、官僚
クルド人	イスラム教 (スンニ派)	農民、兵士、商人
ギリシャ人	ギリシャ正教	商人、職人、農民
アルメニア人	アルメニア教会	商人、職人、医師
ユダヤ人	ユダヤ教	商人、金融業者、職人、医師
スラブ人	東方正教会	農民、兵士、職人



モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマントルコの繁栄と海運

- ・ 激しい征服活動が続いた後、強固な国力を築いてからは、世界の中心であり続けた
- ・ 成功要因は、ダイバーシティ国家
- ・ オスマン帝国がなければ、大航海時代はこなかった。

オスマン帝国の起源と衰退、文化形成に関する考察

- ・ 多文化共生と都市の発展：イスタンブールは、様々な民族が共存し、文化的な融合が進んだ都市
- ・ 軍事力と領土拡大：火薬や大砲の技術革新を取り入れ、軍事力を拡大した
- ・ 貿易と経済の繁栄：重要な貿易ルートを支配し経済的に大いに繁栄した。

オスマン帝国:モンゴル帝国から逃げて小アジアにできたオスマントルコの繁栄と海運

研究テーマ

➤ オスマン帝国はかつてモンゴル帝国から逃げた小アジアにできた小さな国であった。混沌とした時代に、小国から飛び出し、領土を拡大し大国へと駆け上がったオスマントルコ。小国からスタートしたオスマントルコは、どうやって世界的な覇者への階段を上ってきたのか。通商、貿易の観点から、成功した海運のコア・コンピタンスと、組織プロセスについて明らかにする。

研究結果概要

- オスマン帝国は、14世紀にトルコ人がつくったオスマントルコ帝国は、イスラーム教国で、最初は小アジアに位置する小さな国であったが、徐々に領土を広げ地中海を制覇し大国になった。
- 領土内にはアラブ、エジプト、ギリシア、スラヴ、ユダヤ人など、多様な人種・民族をかかえることで、経済を発展させた。
- 人、モノ、経済が集積した。当時のイスタンブール港は、多くの商人や船で賑わい、異なる文化が交差する場所であった。
- 一方で外交においては、引き続き東地中海の覇権をにぎり、海洋交易を強化した。16世紀・中頃までに、バルカン半島、西アジア、北アフリカにまたがる「大帝国」を築いた。この時点でオスマン帝国／ヨーロッパ諸国とのあいだに、力の差はなかった。
- オスマン帝国は多様な民族と宗教が共存する多文化社会であり、各グループがそれぞれの役割を果たすダイバーシティ国家であった。
- オスマン帝国における寛容な政策「柔らかな専制」は、多様な宗教と民族が共存する社会を実現し、長期にわたって安定した統治を維持する要因となった。
- そこにおいて、海運は重要な存在であった。当初は領土を獲得するための戦いに用いられ、やがて領土が拡大すると国を守る軍事としての役割をにない、国家が安定すると、人々の暮らしを守る生活インフラとして活躍した。
- オスマン帝国は、強靱な海運をもっていたが、商船は成長しなかった。その理由は、海軍の直下に船社を置いたために、汚職と腐敗で成功するとはなかった。
- オスマン帝国の成功がなければ、大航海時代の幕開けはなかった。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ オスマントルコ帝国では、海運は、貿易だけでなく、軍事的戦略性においても、軍事的な優位性を保つなど、領土拡大や外交政策において重要な役割を果たしていた。
- ✓ トルコの起源とモンゴル帝国の関わりは非常に深く、モンゴル帝国の支配と影響を受けながら、トルコ民族は中央アジアからアナトリア半島へと移動し、独自の国家を築き上げた。この過程で学んだ知識や技術が、後のオスマン帝国の成立と繁栄に大きく寄与した。トルコの歴史におけるモンゴル帝国の影響は、現代のトルコ文化にもその名残を残している。

1.広大な領土



2.ダイバーシティ国家



人種・民族	宗教	主な職種
トルコ人	イスラム教 (スンニ派)	スルタン、パシヤ、ウラマー、軍指導者、官僚
アラブ人	イスラム教 (スンニ派)	学者、医師、商人、官僚
クルド人	イスラム教 (スンニ派)	農民、兵士、商人
ギリシャ人	ギリシャ正教	商人、職人、農民
アルメニア人	アルメニア教会	商人、職人、医師
ユダヤ人	ユダヤ教	商人、金融業者、職人、医師
スラヴ人	東方正教会	農民、兵士、職人

3.大航海時代の幕開け



オスマン帝国: オスマン帝国の誕生と衰退、文化形成に関する考察

研究テーマ

オスマン帝国が誕生してから、その地域に根付いた、政治形態や宗教体制について考察していく。

研究結果概要

- 1299年に誕生して、飛ぶ鳥を落とす勢いで成長をしていったオスマン帝国。
- 17世紀には東はアゼルバイジャン西はモロッコ、南はイエメン、北はハンガリーまで支配し最大勢力を誇った。
- 多民族国家で宗教の自由化が謳われてはいたがイスラム教が主体となっていた
- オスマン帝国ではミレット制をしき、多民族＆多宗教の統治をおこない経済マンでも繁栄を築いた。

結論：モンゴルの遺産

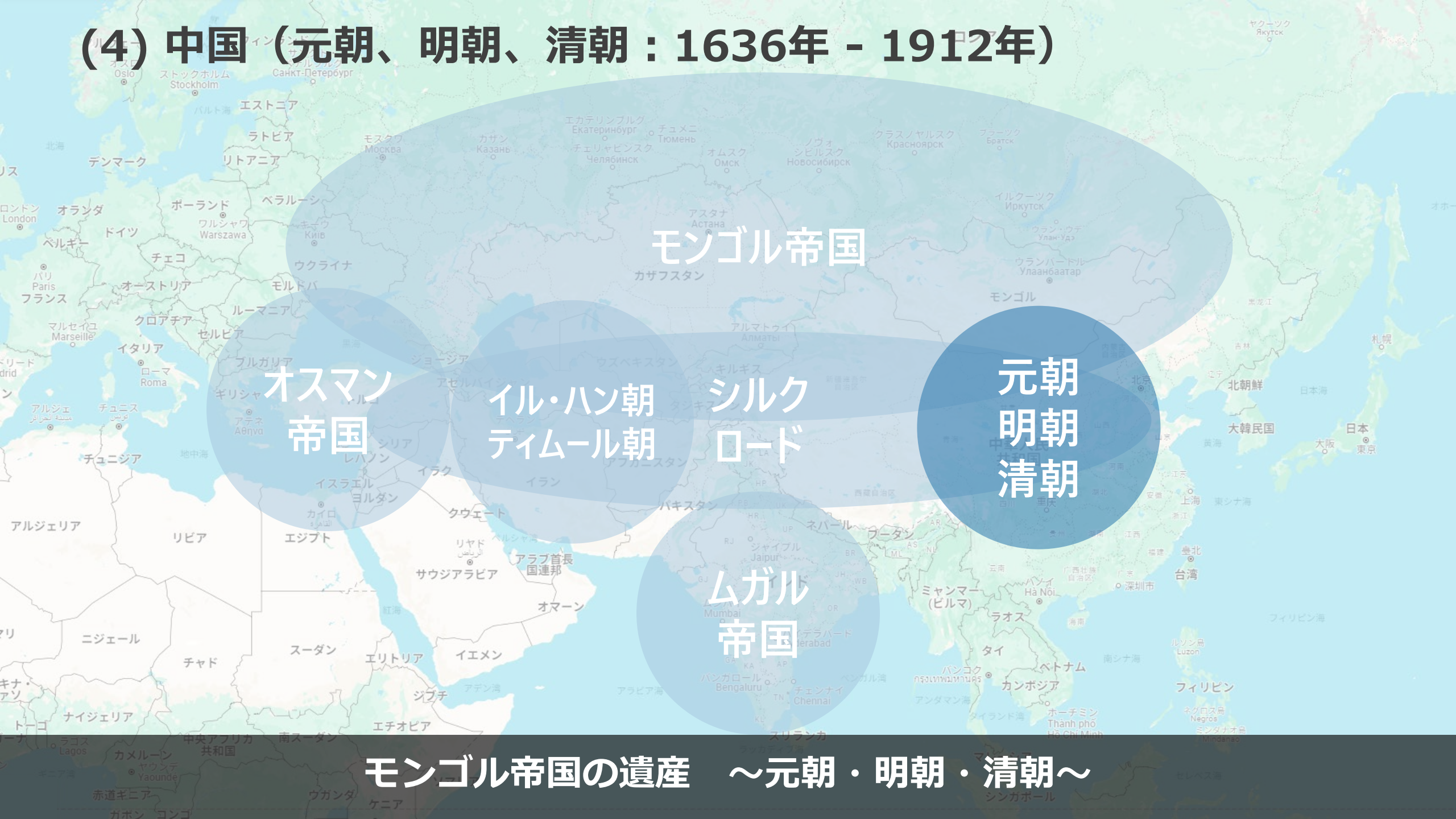
- ✓ オスマン朝はすべての文字がアラビア語だったが、トルコ系民族が多かったためトルコ語も普及した。そこで生まれたものがトルコ＝イスラーム文化である。
- ✓ オスマン帝国ではスルタン制を用いており、二聖都の保護者があった。ここでの二聖都は「メッカ」「メディナ」を指す。



写真



(4) 中国（元朝、明朝、清朝：1636年 - 1912年）



モンゴル帝国

オスマン
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

シルク
ロード

元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

モンゴル帝国の遺産 ～元朝・明朝・清朝～

モンゴル帝国の遺産 ～中国～

モンゴル帝国の国家戦略「宗教の自由」「移動の自由」「経済の自由」がダイバーシティ＆インクルージョンを実現し、その後の多民族統治を可能にした



清朝・乾隆帝がポタラ宮を模して建立した
普陀宗乘之廟（河北省・承德市）

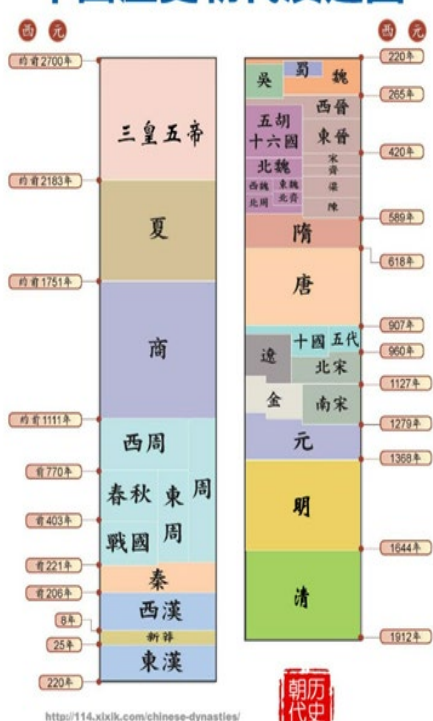
出所：Gisling https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Putuo_Zongcheng_Temple.jpg



チベット・ラサのポタラ宮

出所：Gerd Eichmann https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lhasa-Potala-nachts-16-mit_Springbrunnen-2014-gje.jpg

中国歴史朝代演進図



<http://114.xixi.com/chinese-dynasties/>

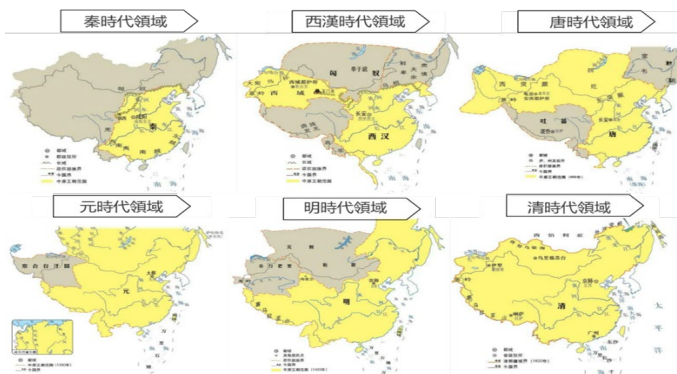
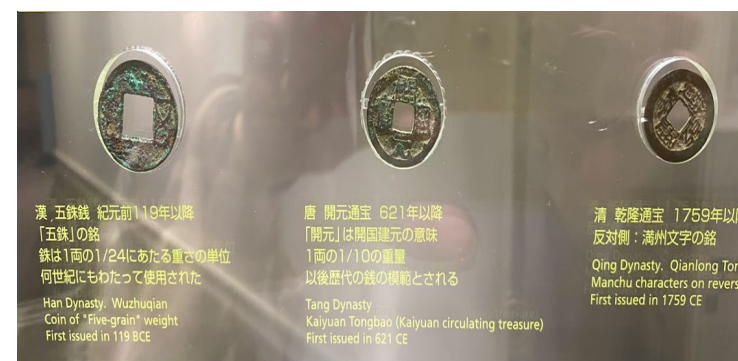


表1 ティムール王朝と明朝の貨物貿易の一部抜粋

No	時期	ティムール王朝	明・ティムール王朝	<実録>
1	1387年	馬15頭；駱駝2頭	白金18錠	185巻p3
2	1389年	馬205頭	白金1100錠	197巻p5
3	1390年	馬670頭		199巻p2
4	1394年	馬300頭		244巻p3
5	1395年	馬212頭	紙幣	239巻p5
6	1396年	馬240頭	紙幣	244巻p2
7	1396年	馬1095頭	紙幣	245巻p7
8	1409年	西馬550頭	彩巾（布類）	97巻p8
9	1419年	西馬・ライオン	白金・金・織品・磁器	210巻p1
10	1456年	駱駝7頭・馬247頭等	白金など	236巻p2
12	1490年	駱駝・馬等		36巻p2



漢 五銖銭 紀元前119年以降
「五銖」の銘
銭は1両の1/24にあたる重さの単位
1両の1/10の重量
何世紀にもわたって使用された
Han Dynasty Wuzhuqian
Coin of "Five-grain" weight
First issued in 119 BCE

唐 開元通宝 621年以降
「開元」は開国建元の意味
1両の1/10の重量
以後歴代の銭の模範とされる
Tang Dynasty
Kaiyuan Tongbao (Kaiyuan circulating treasure)
First issued in 621 CE

清 乾隆通宝 1759年以降
反対側：満州文字の銘
Qing Dynasty Qianlong Tongbao
Manchu characters on reverse
First issued in 1759 CE

出所：横浜ユーラシア文化館より著者撮影



出所：横浜中華街「関帝廟」より著者撮影

モンゴル帝国、清朝共通の統治理念としての「チベット仏教」

- 宗教の自由が多民族を包含した広域統治に寄与した。
- 中でも「チベット仏教」が重要な役割を果たした。
- 仏教の「救済」理念が平和的統治に結びついた。

モンゴル帝国が中国の多民族・多宗教に与える影響

- 複数の政治勢力で分裂状態の中国を再統合した。
- モンゴル族・回回族を含む多民族国家を形成した。
- 中国と西・東南アジアの文化・経済交流に貢献した。

モンゴル帝国の軍事力、経済政策が後世に与えた影響

- モンゴル帝国が遊牧騎馬国家から継承した歴史。
- モンゴル帝国が継承し進化させた国家戦略。
- モンゴル、清が現代に残した遺産。

中国：モンゴル帝国が中国の多民族・多宗教に与える影響

研究テーマ

- 中国地域におけるモンゴル帝国多民族・多宗教政策の特徴
- 元朝・ティムール朝に対する中国人の評価・残された遺産

研究結果概要

- 1)中国の地域統一におけるモンゴル帝国の意義
→中国の歴史の本では、「元」が中国歴史上の一つの王朝として記載
- 2)中国の多宗教・多民族融合におけるモンゴル帝国の意義
 - 元朝の多宗教政策による中国のイスラム教
 - 元朝の第一階級「モンゴル族」と第二階級「回回族」
- 3)中国の文化交流・繁栄におけるモンゴル帝国の意義
 - 中国と西文化の交流と発展
 - 言語の交流・貿易交流（ティムール王朝と明朝まで含む）

結論：モンゴルの遺産

- 1. 中国人にとって、モンゴル帝国といえば「元朝」であり、中国歴史の王朝の一つとして、地域統一における偉大な王朝であった。
- 2. 中国の多宗教・多民族の共存と融合の時代を作り、中国文化と西アジア・東南アジアの文化の交流・経済発展に大きく貢献した時代である。

残された課題：

- 中国と日本を含む他国との評価の比較。
- 初代グローバル時代としてモンゴル帝国の戦略の深堀。

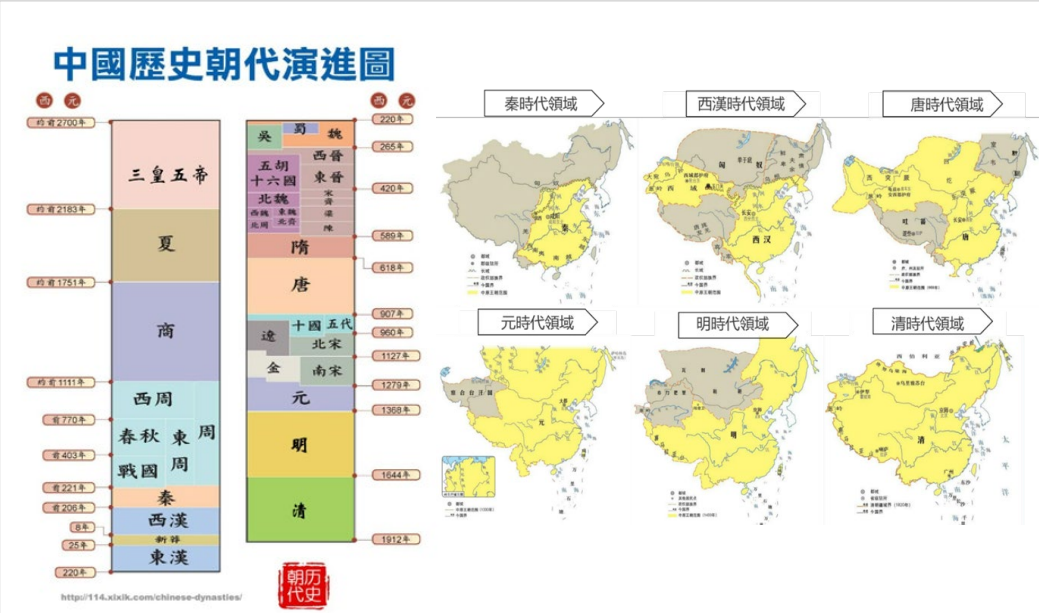


表1 ティムール王朝と明朝の貢物貿易の一部抜粋				
No	時期	ティムール→明朝	明→ティムール王朝	<実録>
1	1387年	馬15頭；駱駝2頭	白金18錠	185巻p3
2	1389年	馬205頭	白金1100錠	197巻p5
3	1390年	馬670頭		199巻p2
4	1394年	馬300頭		244巻p3
5	1395年	馬212頭	紙幣	239巻p5
6	1396年	馬240頭	紙幣	244巻p2
7	1396年	馬1095頭	紙幣	245巻p7
8	1409年	西馬550頭	彩巾（布類）	97巻p8
9	1419年	西馬・ライオン	白金・金丝织品・磁器	210巻p1
10	1456年	駱駝7頭・馬247頭等	白金など	236巻p2
12	1490年	駱駝・馬等		36巻p2

中国：モンゴル帝国、清朝共通の統治理念としての「チベット仏教」

研究テーマ

- 元・清朝の諸民族を包含した「大きな中国」支配には、「チベット仏教」が重要な役割を果たしたのではないか。
- なぜ「チベット仏教」はチベットのみならずモンゴル族、満洲族等に広く受け入れられたのか。
- 異民族王朝である元・清朝は、チベット仏教をどのように漢族支配に利用したのか。

研究結果概要

- ・チベット仏教は、モンゴル帝国の後継国家にとって「チンギス統原理」と並ぶ統治理念だった。
- ・フビライ・カーンと、彼が帰依した「国師」チベット高僧パスパとの関係が後世の政教相互依存モデルとなった。
- ・清朝第2代皇帝、ホンタイジは、服属させたモンゴル・チャハル部から、伝国璽（政治権威）とパスパ製作の仏像（宗教権威）を承継、自らをモンゴル帝国の正当な後継王朝と位置づける。
- ・清朝第6代皇帝、乾隆帝はチベット高僧よりフビライ・カーンの転生、文殊菩薩の化身と認定、その権威で内陸アジア遊牧民と漢族中華世界とともに支配、全盛期を現出。（その象徴が長城の北、承德・避暑山荘（熱河離宮）と外八廟）

結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国は「宗教の自由」を認めたが、「チベット仏教」を統治理念の基礎に据えた。
- ✓ 清朝はモンゴル帝国の実績を継承し、「チベット仏教」を統治イデオロギーに利用。特に、漢民族の考える「華夷秩序」の克服に使った。
- ✓ モンゴル帝国、清朝はともに仏教の「救済」思想を政治の根幹に位置付け、多民族統治に効果を上げた。



清朝・乾隆帝がポタラ宮を模して建立した「普陀宗乘之廟」(河北省・承德市)
著作者: [Gisling](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Putuo_Zongcheng_Temple.jpg) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Putuo_Zongcheng_Temple.jpg



チベット・ラサのポタラ宮

著作者: [Gerd Eichmann](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lhasa-Potala-nachts-16-mit_Springbrunnen-2014-gje.jpg) https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lhasa-Potala-nachts-16-mit_Springbrunnen-2014-gje.jpg

中国：モンゴル帝国の軍事力、経済政策が後世に与えた影響

研究テーマ

- 遊牧騎馬軍隊を有し世界最大帝国となったモンゴル帝国の軍事力、経済政策が清、現代の中国にどのような影響を与えてきたか。

研究結果概要

- ・モンゴル帝国が「世界史の分水嶺」と言われる由縁を過去から遡り、現代に向けて清を経由しどんな影響を与えたのかを探る。
- ・スキタイ国家、ペルシア帝国、匈奴、拓跋国家、キタイ帝国がモンゴル帝国に齎した軍事力と経済を基盤とした国家体系について言及する。
- ・モンゴル帝国がそれらを引き継ぎユーラシア大陸全体を巻き込み進化させた海と陸の経済戦略。
- ・モンゴル帝国が支配した領土とほぼ同じ領域を統治することになる異民族王朝の清が華夷思想と近代化に直面しジレンマに苛まれた問題が現代の中国に及ぼす影響について考察する。

結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国が遊牧民族から受け継いだ国家戦略、軍事力を背景にユーラシア大陸規模の海と陸の経済発展に大きく貢献し、現代の世界経済の基礎を形成した。
- ✓ 「海と火器の時代」に突入し、大航海時代、産業革命を経て圧倒的な軍事力を持つ近代西洋と元の後を引き継いだ異民族王朝、清との出会いが現代の様々な領土問題等の遺産を残した。

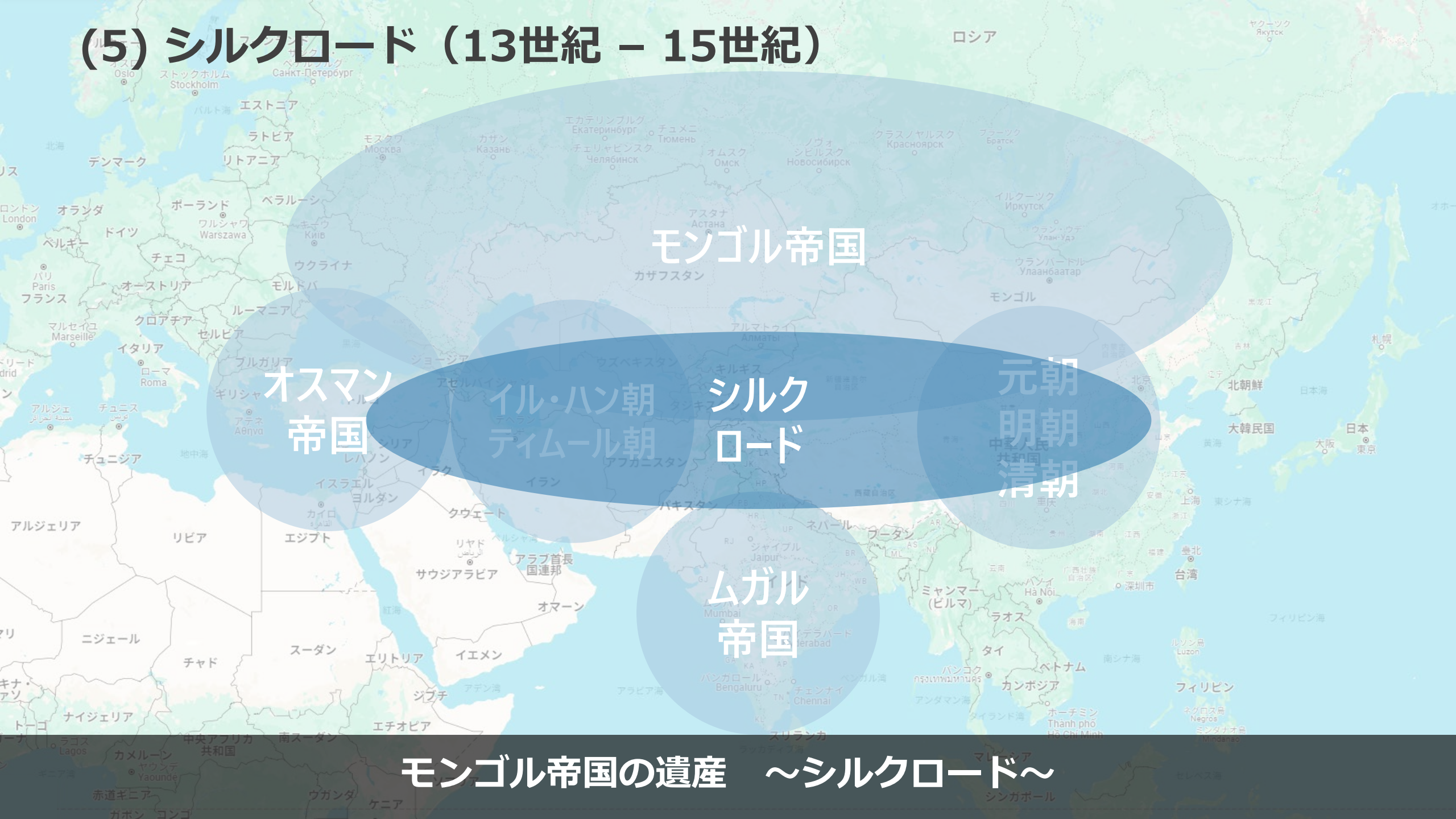


出所：横浜ユーラシア文化館より著者撮影



出所：横浜中華街「関帝廟」より著者撮影

(5) シルクロード (13世紀 - 15世紀)



モンゴル帝国

オスマン
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

シルク
ロード

元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

モンゴル帝国の遺産 ~シルクロード~

モンゴル帝国の遺産 ～シルクロード～

シルクロードが現在に影響を与えたもの ～陶磁器・建造物・食文化～

宋の時代は青磁、白磁の名品が数多く生み出された

元に入ると青花磁器が発展。また、輸出先である西アジアの需要に応じ大型化



定窯 白磁印花草花文盤 -
Ding ware Plate | 陶磁オンライン美術館-TOUJI GRAPHICA VIRTUAL MUSEUM-



龍泉窯 青磁鳳凰耳瓶 -
Longquan Vase with Phoenix | 陶磁オンライン美術館-TOUJI GRAPHICA VIRTUAL MUSEUM-



青花龍文象耳大瓶 元 1351年 ロンドン、デヴィッド財団蔵 (Wikipediaより)

磁器はヨーロッパへ。染付(青花)がブランドの代表的な技術として発展



Moments | ロイヤル コペンハーゲン 公式オンラインストア



ブルーオニオン | ドイツの名窯 マイセン 公式オンラインショップ



キャラバン商人 出所：風の旅行社サイト



サマルカンドのレジスタン広場 出所：クラブツーリズムサイト



出展：朝日新聞GLOBE+



出展：wasabee.co.jp



出展：VOICE of MONGOLIA

モンゴル帝国の交易ネットワークが世界の文化や芸術の発展に寄与した

シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察する

モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響

- ・モンゴル帝国の東西支配が交易を活発化（陸・海）
- ・陶磁器は「海のシルクロード」で世界中へ運ばれた
- ・「マイセン」や「ロイヤルコペンハーゲン」の代表的なデザインとして染付（青花）が引き継がれている

- ・シルクロードはティムール朝を繁栄させた。
- ・キャラバン商人は文化/民族/宗教の交流に貢献した。
- ・この研究成果を日本への提言に繋げました。

- ・周辺諸国に与えた「味付け」の影響は限定的。
- ・征服地の肉食文化の普及や料理名称での影響は残る。
- ・民族性、地域性、気候の違いから独自に発展。

シルクロード:モンゴル帝国の交易ネットワークが世界の文化や芸術の発展に寄与した

研究テーマ

【海のシルクロード】

- モンゴル帝国の広大な支配領域と活発な交易活動は陸路だけでなく海路にも広がり、貿易のみならず文化や芸術の発展に寄与した。中でも陶磁器の発展と世界（特にヨーロッパ）への伝播と、現在につながる技術について考察した

研究結果概要

- ・モンゴル帝国は13世紀から14世紀にかけて東西貿易路を支配し、交易を活発化させた
- ・ユーラシア大陸全体に広がる広大な交易ネットワーク＝内陸部はオゴイ・ハンの時代に整備された駅伝制（ジャムチ）、海上では杭州（南宋時代の臨安）、泉州、広州などの貿易港。また大運河により南部にある経済の中心地の江南と北部にある首都の大都が結ばれ、これらの交通網によりペルシア湾、インド洋、東アジア、エジプトなどへ交易が広がった
- ・当時、磁器は中国でしか作られず、貴重品であり世界で珍重されていた
- ・磁器は重量物のため陸路での運搬よりも海上輸送が適しており、遺跡や沈没船からの発掘で海路で世界中へ運ばれていたことがわかる。この海路は《陶磁の道》や《海のシルクロード》と呼ばれている
- ・このような交易が東西世界の相互の文化的交流を促進した。アラビア世界（西方）からコバルトブルー（顔料）が中国（東方）にもたらされ、染付技術が磁器に用いられるようになった

結論：モンゴルの遺産

- ✓ 元代の磁器「青花」＝白地に青の文様を表した磁器の発展。青花は「青い文様」で、英語では「ブルー・アンド・ホワイト」、日本語では「染付」という
- ✓ 元代には西アジアから輸入されたコバルト顔料が使用されており、この顔料を中国では「回青」または「回回青」（「イスラム圏の青」の意）、日本語では「呉須」という
- ✓ 青花は釉下彩の一種。成形した器をいったん素焼きし、酸化コバルトを含む顔料で器面に絵や文様を描く。その上から透明釉を掛けて高火度で還元焼成すると顔料は青色に発色する
- ✓ 釉下彩の技法は唐時代の長沙窯に先例があるが、元時代の景德鎮窯から盛んになった
- ✓ モンゴルによる東西交流の世界へ磁器を伝播させ、中国でしか作れなかった磁器がヨーロッパで作られるようになるが、今なおその技術が使われ、この染付技術を伝統的に使用しているのが「マイセン」や「ロイヤルコペンハーゲン」といったブランドである

宋時代は青磁、白磁の名品が数多く生み出された



定窯 白磁印花草花文盤 - Ding ware Plate | 陶磁オンライン美術館-TOUJI GRAPHICA VIRTUAL MUSEUM-



龍泉窯 青磁鳳凰耳瓶 - Longquan Vase with Phoenix | 陶磁オンライン美術館-TOUJI GRAPHICA VIRTUAL MUSEUM-

元時代は青花磁器が発展。また、輸出先である西アジアの需要に応じ大型化したことも特徴



青花龍文象耳大瓶 元 1351年 ロンドン、デヴィッド財団蔵 (Wikipediaより)

磁器はヨーロッパへ。染付(青花)がブランドの代表的な技術として受け継がれている



Moments|ロイヤル コペンハーゲン 公式オンラインストア



ブルーオニオン|ドイツの名窯 マイセン 公式オンラインショップ

シルクロード: シルクロードの歴史からツーリズムの起源を考察する

研究テーマ

【陸のシルクロード】

- モンゴル帝国やティムール朝がシルクロードをどのように制御し、そこを利用していた商人がどのような行動をとっていたかを研究し、ツーリズムの起源を考察する。

研究結果概要

- シルクロードはモンゴル帝国の整備された駅伝網によって発展し、ヒト・モノ・文化の交流が空前の盛況を呈した。
- ティムール朝はモンゴル帝国から駅伝網を継承し、シルクロード貿易を通してサマルカンドを文化交差点として繁栄させた。
- シルクロード貿易は、軽くて高価な奢侈[沙シ]品（贅沢品・威信財）貿易であった。
- シルクロードは過酷な自然環境や盗賊などの横行する危険な場所の往来であり、キャラバン隊を編成して安全性を高めていた。
- 旅の途中で立ち寄る土地には、キャラバンサライ（宿泊施設）が作られ、道中必要になる雑貨や武器などを扱う商人や職人が集まり栄えていた。
- シルクロードは奢侈品だけではなく、文化や民族、宗教などが融合することによって、人々を魅了する建造物などを後世に残し、今も旅人を魅了している。



キャラバン商人(風の旅行社サイトより)

結論：モンゴルの遺産

- ✓ ティムール朝はモンゴル帝国の整備された駅伝網を継承し、シルクロードを通して文化や民族そして宗教が融合することで更なる繁栄を成し遂げた。
- ✓ その痕跡は、今もなお世界遺産として後世に引き継がれ、現在の旅人を魅了している。
- ✓ 近代ツーリズムの始まりは、17世紀から18世紀にかけてイギリス貴族や豊かな上流階級の子弟の学業終了時のヨーロッパ大陸周遊修学旅行と言われている。
- ✓ ツーリズムの定義によると、シルクロードを旅したキャラバン商人や旅人もその定義に該当すると思われるため、ツーリズムの起源はシルクロードにあると考えられる。
- ✓ 観光立国を掲げている日本は、古き良きに時代の建造物を残した上で、キャラバン商人の代替として訪日外国人や在日外国人によって文化や民族そして宗教が融合することで新たな魅力を蓄積することができると思われる。
- ✓ そして観光産業が日本を支える基幹産業へと育成することに繋がる可能性を提言したい。



サマルカンドのレジスタン広場(クラブツーリズムサイトより)

シルクロード: モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響

研究テーマ

- モンゴル帝国が食文化において近隣諸国及び後世に与えた影響について、近隣諸国の料理と比較して考察する

研究結果概要

1、モンゴル料理の特徴

- ・乳製品（白い料理）と肉製品（赤い料理）を素材とし、味付けは塩中心で香辛料はあまり使わない料理
- ・昔から羊/牛肉と乳製品中心の料理。宮廷料理も滋養重視の考え方

2、周辺諸国料理（ムガル帝国、オスマントルコ帝国）との共通性と相違性

共通性：①塩調味料圏、②肉（特に羊肉）が多くスープなどがだしとして味質の向上に貢献、
③乳製品が食用/飲料などで多く登場

相違性：周辺諸国料理はスパイス、香辛料、油を多用

理由として、①機構、エリア条件の違いからくる相違、②遊牧民/定住民の生活様式の違いからくる相違
③交易ネットワークの活用（海上の道-陶器の道-香料の道）、④宗教的な影響

3、その他諸国に与えた影響

- ・朝鮮半島への肉食文化の普及/料理名への影響（タルタルステーキ、ジンギスカン、等）



出展：朝日新聞GLOBE+

出展：wasabee.co.jp



出展：VOICE of MONGOLIA

結論：モンゴルの遺産

- ✓ モンゴル帝国の料理は素材が限定されていることや味付けのシンプルさゆえ、料理やメニューに与えた影響は限定的
- ✓ 一方で、征服地への肉食文化の普及や、モンゴルを想起させるような「料理名への波及」など、一定の後世への影響はあるものと推察される

6. フィールドワーク(1)

モンゴル大使館

実施日：8月2日（火）15:00～17:00

研究者：参事官・領事部長（ルンダ・ダワ・ジャルガル）、三等書記官（マイツェツィグ・シェヘグドルジ）



モンゴル大使館訪問

- ❑ 面談日時 : **8月20日 (火) 15:00~17:00**
- ❑ 面談者 : 先方2名 **参事官・領事部長 (ルンダ・ダワ・ジャルガル)**、**三等書記官 (マイツェツェグ・シエバグドルジ)**
当方7名 学部生(高),大学院生(阿達, 佐々木, 菅沼, 二本柳), 指導教員(金, 平石)
- ❑ 意見交換内容 : モンゴル帝国設立後の、ティムール朝、ムガル帝国への歴史変遷について
 - ①モンゴル国学校では生徒にどんな歴史を教えているのか？
 - ②シルクロードの役割としてどのような文化交流であったのか？衰退する時期はあったのか？
 - ③陶器はモンゴル帝国の文化・芸術の発展に寄与したのか？
 - ④徴税の仕組みはあったのか、銀・塩・絹等徴、国に収める仕組みは変わっていったのか？



フィールドワーク(1) モンゴル大使館



モンゴル大使館 領事部長（ルンダ・ダワージャルガル氏）説明コンセプト 2点

1. モンゴルとしてのアイデンティティを歴史に求め向上する

2. モンゴルの歴史をみなさんに理解してもらいたい



モンゴルから見た歴史認識や多民族国家の特徴など、幅広く学ぶことが出来た

①モンゴルの教育と歴史

義務教育は6歳から15歳まで9年間
歴史教育は社会主義時代と現在で異なる

【社会主義時代の教育】

原始共産性 資本主義
奴隷制 社会主義
封建制

【現代の歴史教育】

原始時代 近世・近代
古代 現代
中世

②モンゴルの歴史研究と日本

日本人は漢字が読めるため、モンゴルの歴史解明が盛んに行われている

モンゴルには遺跡や文献が残っておらず研究も進んでいないが、中国の漢文で記された歴史書に残されている。漢字の読める日本人で歴史解明の研究が進んだ(モンゴル人は漢字を読む文化がない)

③日本人の歴史認識

“モンゴル国”と“内モンゴル”の違い歴史認識不足

モンゴル人が罪を犯した際、日本の法廷は通訳に内モンゴル自治区の人材を採用することがあるが、実際は中国人であり、方言が強く正しい通訳できない。日本の司法の歴史認識が不明確であることに強く憤慨している。

④シルクロードの繁栄と衰退

モンゴル帝国の勢力拡大に伴い地域が安定化し繁栄、元朝の崩壊と共に海路へシフト

チンギス・カンはシルクロードを利用し世界貿易を規制・保護し重要な貿易路として繁栄。元朝の崩壊と共にフビライ・カンの頃、陸路から海路へのシフトが進んだ



6. フィールドワーク(2)

中央アジアにおけるテュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在

実施日：11月2日（土）16:30～18:00

研究者：和崎聖日（わざき せいか）中部大学人文学部准教授

共著『中央ユーラシア文化事典』、『イスラーム文化事典』など

フィールドワーク(2) テュルク・モンゴル系遊牧諸部族の歴史と現在

❑ 宗教と文化

- 「テングリ信仰（シャマニズム）」がイスラームに融合
- 一部でシャマニズム的要素が残存

❑ 中央アジアの形成

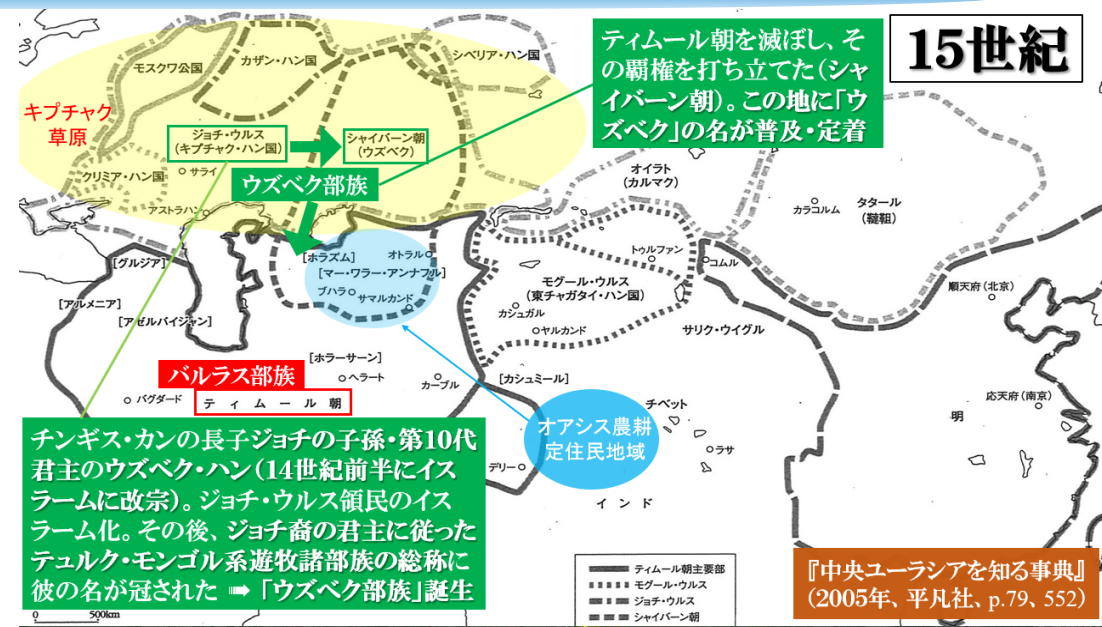
- 1924年の民族・協和国境界画定でウズベク人などの民族が創出
- それ以前は宗教と生活様式（定住/遊牧）をもとにして帰属意識

❑ ウズベク人の特徴

- 定住民系と遊牧民系に分かれ、部族意識が強い
- コングラト部族など、モンゴル帝国時代からの歴史を持つ

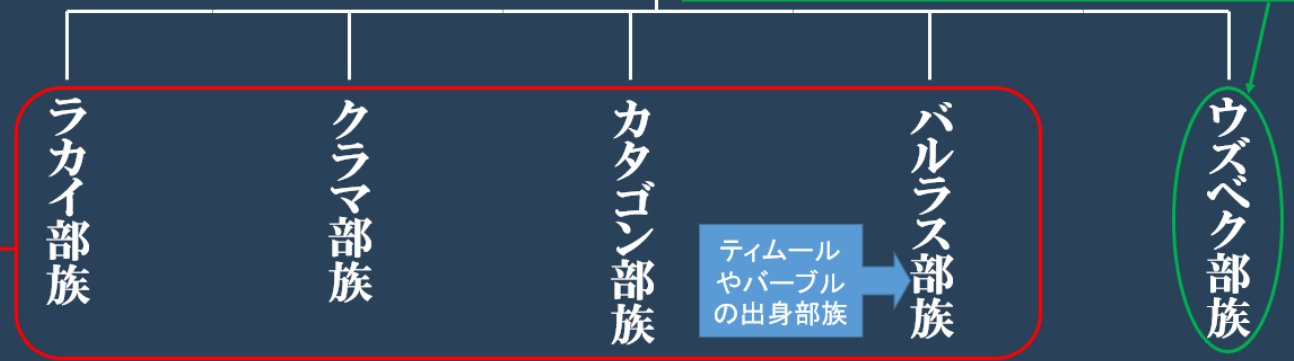
❑ イスラーム化の進展

- 南部定住民は8～9世紀にイスラーム化
- 北部遊牧民は9～20世紀にかけて改修しシャマニズムの影響が残る

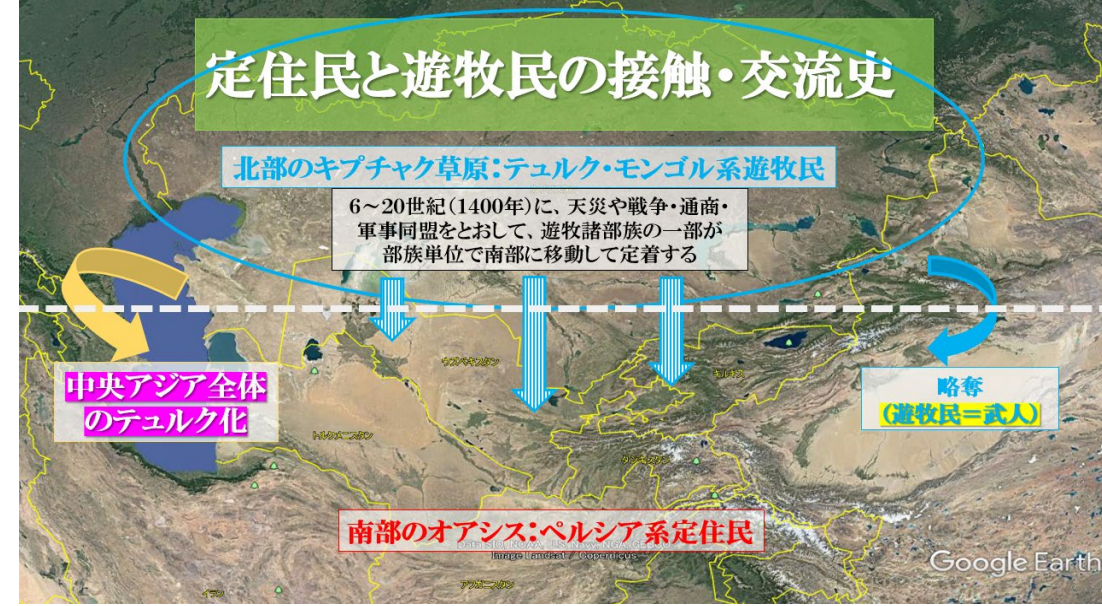


旧遊牧民系ウズベク人(以下にその一部を抜粋)

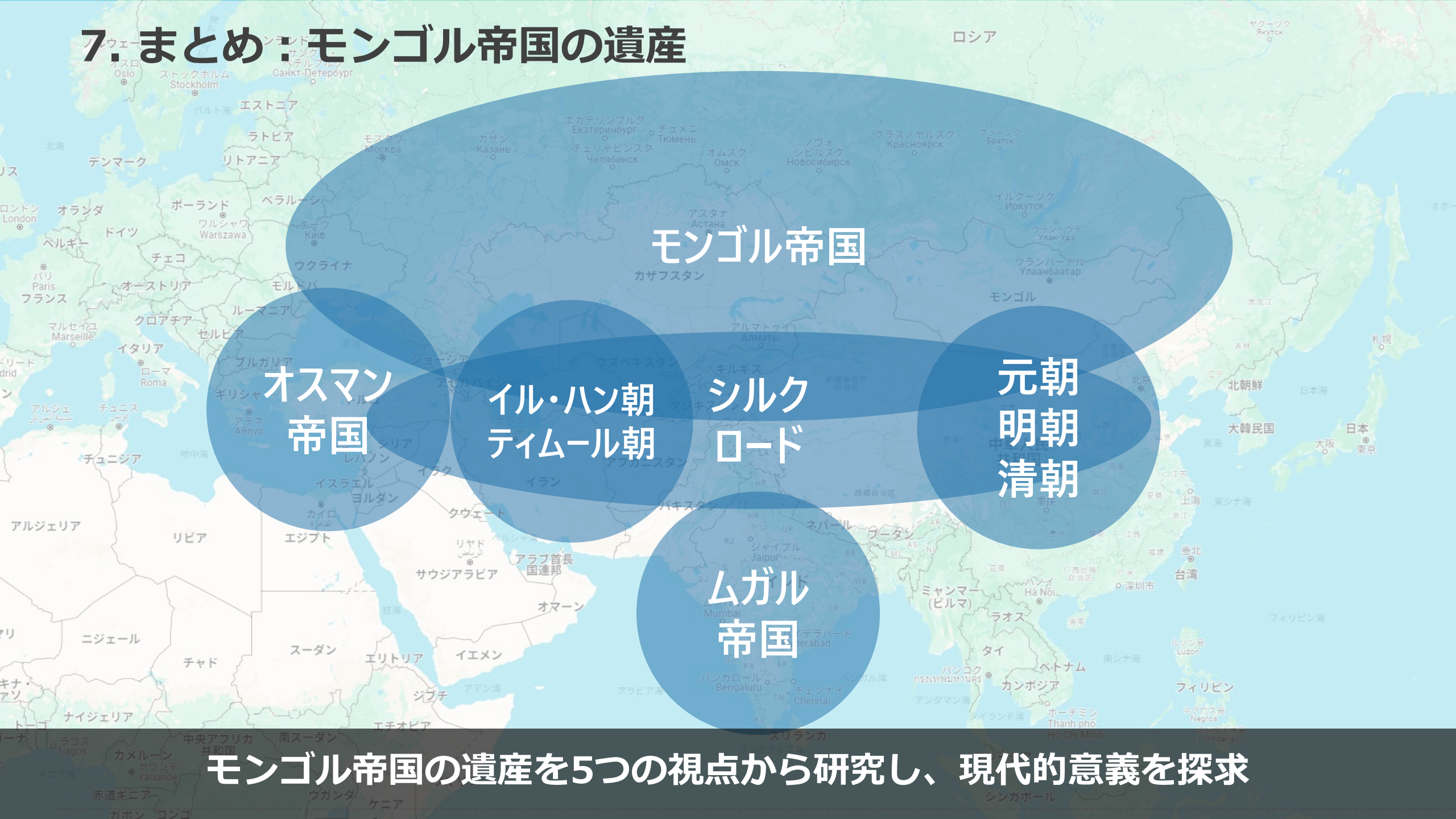
15世紀にこの地に侵攻し、20世紀初頭に定住生活に移行したテュルク系部族、部族意識を残す



13世紀のモンゴル侵攻以前にこの地に来たテュルク系諸部族、定住民と交わらず半遊牧、部族意識を残す



7. まとめ：モンゴル帝国の遺産



モンゴル帝国

元朝
明朝
清朝

ムガル
帝国

イル・ハン朝
ティムール朝

シルク
ロード

オスマン
帝国

モンゴル帝国の遺産を5つの視点から研究し、現代的意義を探究

7. まとめ：モンゴル帝国の遺産

【シルクロード(陸・海)】 世界貿易

- モンゴル帝国が可能にした東西貿易路により、モンゴルの文化そのものではなく、**各地の陶磁器・建築・技術・食文化**などが広範囲に伝播した
- (例)中国の陶磁器技術が、現代の欧州の染付に影響を与えた

【元朝・明朝・清朝】 中国

- モンゴル帝国の国家戦略であった**宗教・移動・経済の自由が多民族統治を可能にした**
- 今で言う「ダイバーシティ & インクルージョン」といえる

【オスマン帝国】 トルコ

- トルコ民族は、モンゴル帝国を逃れ独自の国家を築いた
- 現代のトルコ文化には、**モンゴル帝国の影響の名残**がある

【イル・ハン朝・ティムール朝】 イラン、ウズベキスタン

- 中央・西アジアでは**16世紀初頭までモンゴル系の政権が続**き、モンゴル帝国流の統治が行われた。モンゴル支配の影響は残ったが、近代以降は薄れた

【ムガル帝国】 インド

- ムガル帝国のモンゴル帝國的な統治はティムール朝の子孫として引き継いだもので、**モンゴル帝国を直接に意識してはいなかった**
- 「ムガル」は北からインド地域への侵入者全般を指す語で、当初「モンゴル」の意味はなかった

モンゴル帝国の遺産を5つの視点から研究し、現代的意義を探求

7. 今後の研究課題

ティムール朝

- 紙幣としての塩の取引権価値の下落が与えた影響について(阿達)
- 近代から現代にかけてのイランでは過去のモンゴル系の支配をどうとらえているか(杉)

ムガル帝国

- モンゴル帝国とムガル帝国の政治的影響(佐々木)
- インドの多様な民族性について(須貝)

オスマン帝国

- オスマン帝国の各時代の君主(スルタン)について(倉 元)

元朝・明朝・清朝

- 現代中国におけるチベット問題について(菅沼)
- モンゴル帝国の意義における国間の評価比較(禹)
- 現代の中国における清から引き継いだ領土問題(山中)

シルクロード

- 後世に建造物などを残したシルクロードの時代ごとの特徴(二本柳)
- 染付（青花）以外の磁器の世界へ広がりや、有田焼など日本の陶磁器の発展における中国磁器の影響（小柳）



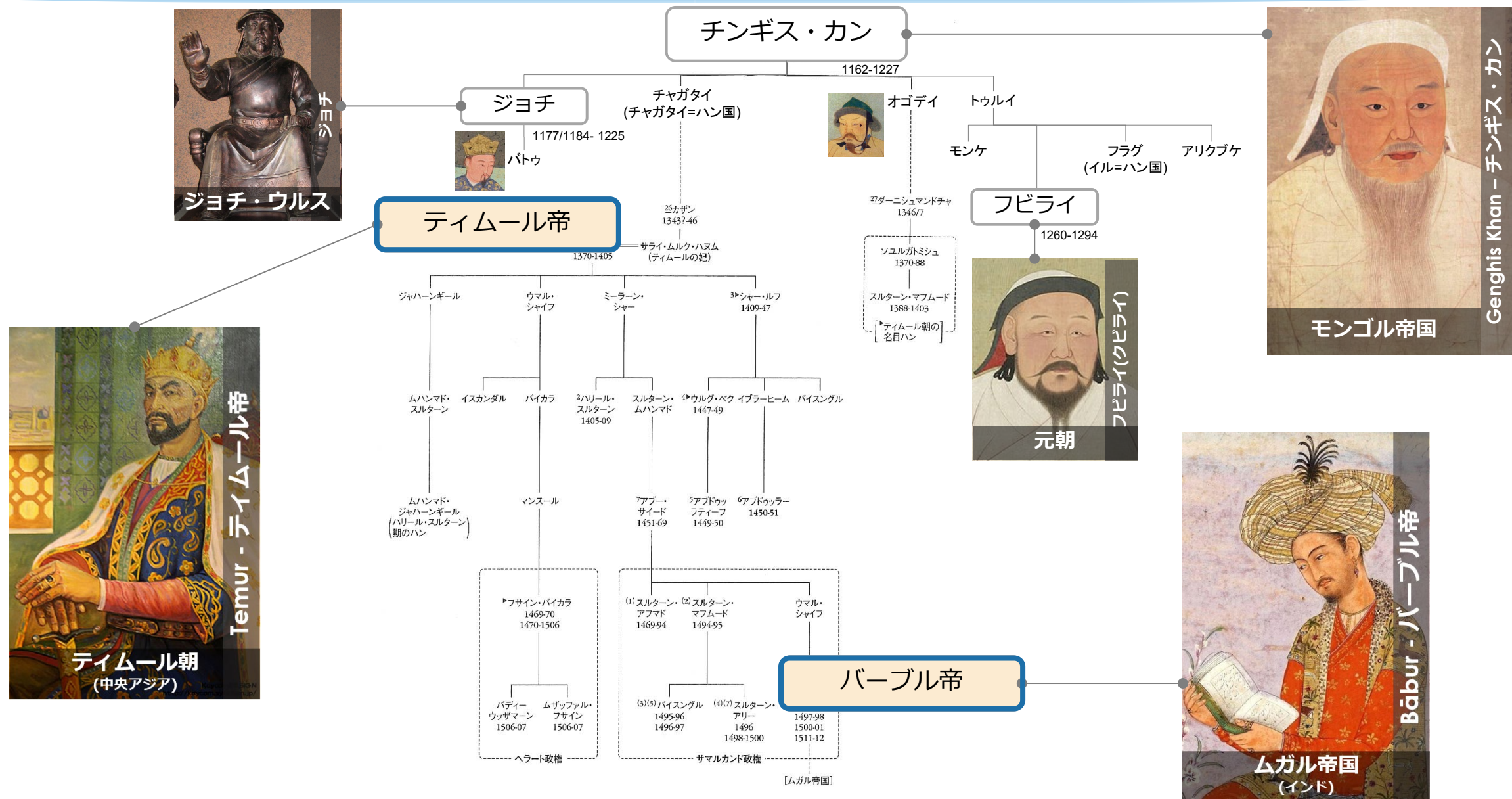
ご清聴ありがとうございました

第16期
インターゼミ(社会工学会)
アジアダイナミズム班

学部生 : 高、吉川
大学院生 : 阿達、禹、倉元、小柳、佐々木
須貝、菅沼、杉、二本柳、山中
佐藤
指導教員 : 金美徳、平石隆司

appendix

モンゴル帝国の血縁：一部抜粋



参考文献 -1

【書籍：計72件】

- 1 . Metcalf, Barbara D., Metcalf, Thomas R. 『A Concise History of Modern India 2nd Ed (Cambridge Concise Histories) 』 (Cambridge University Press、2006)
- 2 . 何孝荣 『明朝宗教』 (南京出版社、2013)
- 3 . 何其敏 『中国明代宗教史』 (人民出版社、1994)
- 4 . 邱树森 『中国回族史』 (宁夏人民出版社、1996)
- 5 . 姜公韬 『中國通史・明清史・第二章・明太祖の開國規模』 (九州出版社、2010)
- 6 . 周燮藩 『伊斯教在中国』 (华文出版社、2002)
- 7 . 张文德 『明与帖木儿王朝关系史研究』 (中华书局、2006)
- 8 . 丁毅民 『回回民族的来源和发展』 (宁夏人民出版社、1983)
- 9 . 陈垣 『元西域人华化考[M]』 (上海古籍出版社、2000)
- 10 . 荒川正晴 他 『構造化される世界 14～19世紀 (岩波講座世界歴史11)』 (岩波書店、2022)
- 11 . 荒川正晴 他 『モンゴル帝国と海域世界 12～14世紀 (岩波講座世界歴史 10) 』 (岩波書店、2023)
- 12 . 荒川正晴 他 『西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀 (岩波講座世界歴史13)』 (岩波書店、2023)
- 13 . 石濱裕美子 『物語 チベットの歴史——天空の仏教国の1400年』 (中公新書、45017)
- 14 . 小笠原弘幸 『オスマン帝国 繁栄と衰亡の600年史』 (中央公論社、2018)
- 15 . 沖本克己・菅野博史編集 『中国文化としての仏教-新アジア仏教史08 中国Ⅲ宋元明清』 (佼成出版社、40422)
- 16 . 沖本克己・福田洋一編集 『須弥山の仏教世界-新アジア仏教史09 チベット』 (佼成出版社、40269)
- 17 . マルコポーロ・愛宕松男訳 『東方見聞録』 (平凡社、2000)
- 18 . 愛宕松男・寺田隆信 『モンゴルと大明帝国』 (講談社、1998)
- 19 . 辛島昇 他 『南アジア史 (新版 世界各国史 7)』 (山川出版社、2004)
- 20 . 川口琢司 『ティムール帝国』 (講談社、2014)
- 21 . 菊池秀明 『越境の中国史——南からみた衝突と融合の300年』 (講談社、2022)
- 22 . 木谷勤 『帝国主義と世界の一体化 世界史リブレット40 』 (山川出版社、1997)
- 23 . 木下光弘 『中国の少数民族政策とポスト文化大革命——ウランフの「復活」と華国鋒の知られざる「功績」』 (明石書店、44228)
- 24 . 久保一之、木村暁、井上治 『ポスト・モンゴル期』 (山川出版社、2018)
- 25 . クロー、アンドレ 『イスラーム文化叢書 3 ムガル帝国の興亡』 (法政大学出版局 杉村裕史訳、2001)

参考文献 -2

- 26 . 黒田勝彦、小林ハッサル柔子 『文明の物流史観』(成山堂書店、2021)
- 27 . ゲーテ、J.W. 『西東詩集』(岩波書店、1962)
- 28 . ツルティム・ケサン、正木晃 『増補チベット密教』(ちくま学芸文庫、39569)
- 29 . 小磯千尋・小磯学 『世界の食文化 インド』(農文社、2006)
- 30 . 小長谷有紀 『世界の食文化 モンゴル』(農文社、2005)
- 31 . 小長谷有紀 『アジア読本 モンゴル』(河出書房新社、1997)
- 32 . 小林亮介 『近代チベット政治外交史——清朝崩壊にともなう政治的地位と境界』(名古屋大学出版会、45323)
- 33 . 小松香織 『オスマン帝国の海運と海軍』(山川出版社、2020)
- 34 . 小松久男 他 『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』(山川出版社、2000)
- 35 . 坂本勉 『未完のトルキスタン国家』(講談社、1996)
- 36 . 沢田勲 『匈奴 古代遊牧国家の興亡』(東方書店、1996、2015)
- 37 . 白石典之 『チンギス・カンとその時代』(勉誠出版、2015)
- 38 . 杉山正明 『遊牧民から見た世界史』(日本経済新聞社、1997)
- 39 . 杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後 興亡の世界史 第9巻(2008)、講談社学術文庫(2016) 』(講談社、2008、2016)
- 40 . 杉山正明 『「婿どの」たちのユーラシア』(講談社、2016)
- 41 . 杉山正明 『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』(講談社学術文庫、2016)
- 42 . 杉山正明 『モンゴル帝国の興亡(上、下)』(講談社、35205)
- 43 . 杉山正明 『モンゴルが世界史を覆す』(日本経済新聞社、2006)
- 44 . 杉山正明 『陸と海の巨大帝国 大モンゴルの世界』(角川選書227、1992、1998)
- 45 . 鈴木董 『世界の食文化 トルコ』(農文社、2003)
- 46 . 陳舜臣 『世界の都市の物語 イスタンブール』(文春文庫、36039)
- 47 . 寺島実郎 総監修 『モンゴル帝国とユーラシア史: 社会人・大学院生・学生の目線からのグローバルヒストリー (多摩大学インターゼミ教育研究業績シリーズ)』(多摩大学出版会、2023)
- 48 . 寺島実郎 『人間と宗教——あるいは日本人の心の基軸』(岩波書店、44501)
- 49 . 寺島実郎 『大中華圏』(NHK出版、2012、2024)
- 50 . 永田雄三 『西アジア史 II 新版 世界各国史9』(山川出版社、2022)

参考文献 -3

- 51 . ジャワーハルルール・ネルー 『父が子に語る世界史3 ルネサンスから産業革命へ』 (みすず書房 大山聰訳、 2002)
- 52 . 野田仁 『露清帝国とカザフ＝ハン国』 (東京大学出版会、 2011)
- 53 . 白寿彝 『元代回教人与回教』 (宁夏人民出版社、 1983)
- 54 . 羽田正 『イラン史』 (山川出版社、 2020)
- 55 . P.N.チョプラ 『インド史』 (法蔵館 三浦愛明訳、 1994)
- 56 . 平野聡 『清帝国とチベット問題——多民族統合の成立と瓦解』 (名古屋大学出版会、 38169)
- 57 . 平野聡 『大清帝国と中華の混迷』 (興亡の世界史 第17巻』 講談社、 39356)
- 58 . 马明道 『伊斯兰对中华文化之影响』 (台湾中国文化大学出版社、 1982)
- 59 . 松下憲一 『中華を生んだ遊牧民 鮮卑拓跋部の歴史』 (講談社、 2023、 2024)
- 60 . 間野英二 『世界史リブレット人④6 バールムガル帝国の創設者』 (山川出版社、 2013)
- 61 . 間野英二 『バールムガル・ナーマの研究I 校訂本』 (松香堂、 1995)
- 62 . 三上次男 『陶磁の道—東西文明の接点をたずねて—』 (岩波書店、 25416)
- 63 . 三上次男 他 『出光コレクションの名品から 陶磁の道』 (出光美術館、 36617)
- 64 . 三杉隆敏 『マイセンへの道 東西陶磁交流史』 (東書選書、 33878)
- 65 . 森安孝夫 『シルクロード世界史』 (講談社、 2020)
- 66 . 安田亘宏 『インバウンド実務主任者認定試験公式テキスト』 (一般財団法人全日本情報学習振興協会、 2021)
- 67 . 山川徹 『カルピスを作った男』 (小学館、 2018)
- 68 . 杨怀中 『伊斯兰与中国文化』 (宁夏人民出版社、 1995)
- 69 . 李德洙等编写组 『回族简史』 (宁夏人民出版社、 1978)
- 70 . 歴史学研究会 『世界史史料2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』 (岩波書店、 2009)
- 71 . フランシス・ロビンソン 『ムガル皇帝歴代誌インド、イラン、中央アジアのイスラーム諸王国の興亡』 (創元社 月森左知訳、 2009)
- 72 . 早稲田大学モンゴル研究所(編) 『モンゴル史研究——現状と展望』 (明石書店、 2011)

参考文献 -4

【論文: 計42件】

- 1 . Gier, Nicholas F. 『From Mongols To Mughals: Religious Violence In India 9th-18th Centuries』 (University of Idaho, 2006)
- 2 . Gopal, Mohan 『India & Mongolia in the Middle Ages – More Than Just a Connection』 (Ancient History of Asian Countries, p56-60., 2019)
- 3 . 姚大力 『元朝在中国 历史上的意义』 (、 2018)
- 4 . 张文德 『明与中亚帖木儿帝国的礼仪往来』 .西域研究, p.9-39、2005(3))
- 5 . 乌云高娃 『元朝统一多民族国家治理及启示』 (中国社会科学报. 第2401期、 2022)
- 6 . 张文德 『论伊斯兰教对中亚帖木儿王朝的影响』 (贵州师范大学社会科学版. p44、 1995)
- 7 . 薄音湖 『北元与明代蒙古』 (内蒙古大学学报. 第1期、 1994)
- 8 . 方铁 『蒙元经营西南边疆的统治思想及治策』 (中国边疆史地研究 12卷1期. p15-23、 2002)
- 9 . 姚继荣 『明代西北马政机构置废考』 (青海师范大学学报. 第2期、 1993)
- 10 . 井谷鋼造 『トルコ民族の活動とモンゴル支配時代』 (山川出版社、「イラン史」 p.47-105、 2020)
- 11 . 小笠原弘幸 『オスマン王権とその正統性——血統』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀」、 2023)
- 12 . 川口琢司 『キプチャク草原とロシア』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 11「中央ユーラシアの統合—9-16世紀」 p.275-302、 1997)
- 13 . 川口琢司 『カラチュの時代—ティムール朝を中心に』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——一二～一四世紀」 p.295-311、 2023)
- 14 . 久保一之 『ティムール朝とその後——ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史第11「中央ユーラシアの統合—9-16世紀」 p.147-176、 1997)
- 15 . 小谷汪之 『ムガル帝国とマラーターの時代』 (山川出版社、 新版世界各国史 7「南アジア史」 p.232-272、 2004)
- 16 . 後藤裕加子 『サファヴィー朝後期のシャーの移動と『統治の都』』 (人文論究, vol. 64, no. 2, page. 29-57、 2014)
- 17 . 小松香織 『海運資料に見るオスマン帝国末期の社会変容』 (イスラーム地域研究ジャーナル Vol. 5、 2013)
- 18 . 近藤信彰 『サファヴィー帝国におけるシーア派法秩序の形成』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史 13「西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀」、 2023)
- 19 . 近藤信彰 『近代イランにおけるテュルク的過去の参照』 (山川出版社、 新版 世界各国史9「西アジア史 II 」 p.107-120、 2023)
- 20 . 島田竜登 『構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史11「構造化される世界 14-19世紀」 p.3-62、 2022)
- 21 . 志茂碩敏 『モンゴルとペルシア語史書——遊牧国家史研究の再検討』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史11「構造化される世界 14-19世紀」 p.249-274、 1997)
- 22 . 新藤義彦 『モンゴル・タタールのロシア支配』 (アジア研究所紀要 4 (1977年)、 p.129-150、 1977)
- 23 . 杉山正明 『中央ユーラシアの歴史構図』 (岩波書店、 岩波講座世界講座11「構造化される世界 14-19世紀」 p.3-89、 1997)
- 24 . ソウザ、ルシオ・デ、岡美穂子 『奴隷たちの世界史』 (岩波書店、 岩波講座世界歴史11「構造化される世界 14-19世紀」 p.131-160、 2022)
- 25 . 中見立夫・濱田正美・小松久男 『中央ユーラシアの周縁化』 (山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.143-p.173、 2000)

参考文献 -5

- 26 . 羽田正 『ペルシア語文化圏の形成と変容』(山川出版社、「イラン史」 p.106-159、2020)
- 27 . 濱田正美 『中央ユーラシアの「イスラーム化」と「テュルク化」』(山川出版社、「中央ユーラシア史」 p.277-p.341、2000)
- 28 . 林佳世子 『西アジア・南アジアの近世帝国』(岩波書店、岩波講座世界歴史13「西アジア・南アジアの帝国—16～18世紀」、2023)
- 29 . 藤田勉 『米国とイランの対立が激化する歴史的背景』(公益財団法人資本市場研究会「月間資本市場」2020-2 p. 60-67、)
- 30 . 堀川轍 『モンゴル帝国とティムール帝国』(山川出版社、中央ユーラシア史 p.174-p.244、2000)
- 31 . 真下裕之 『ムガル帝国における国家・法・地域社会』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀」 p.115-148、)
- 32 . 眞下裕之 『16世紀前半北インドのMug(・)ulについて』(東方學報 京都第72冊 : 738-720頁、2000)
- 33 . 松田孝一 『モンゴル帝国の統治制度とウルス』(岩波書店、岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界——12～14世紀」 p.77-106、2023)
- 34 . 宮原辰夫 『北インドにおけるイスラーム諸王朝とその建築物 —デリー・スルターン朝末期とムガル帝国初期を中心に—』(文教大学国際学部紀要第26巻1号 p.85-117、2015)
- 35 . 森達也 『ユーラシア世界の中国陶磁流通』(岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀」 p.279-294、2023)
- 36 . 守川知子 『サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド：一六世紀イランにおけるシーア派都市の変容』(京都大学文学部、史学研究会「史林」80-2 p.167-207、1997)
- 37 . 矢崎正見 『チベットに対する元朝の宗教政策』(立正女子大学短期大学部 研究紀要 第14集 p.56-64、2012)
- 38 . 矢沢知行 『モンゴル元朝治下の江南地域社会をめぐる諸論点』(愛媛大学教育学部紀要 第62巻 245～253、2015)
- 39 . 山崎岳 『アジア海域における近世的国際秩序の形成——一四・一五世紀の危機と再生』(岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」 p.163-182、2022)
- 40 . 山下範久 『一四—一六世紀における「パワーポリティクス」——ポストモンゴルから自由主義的国際秩序までの帝国間関係の変容』(岩波書店、岩波講座世界歴史11「構造化される世界——14～19世紀」 p.63-96、2022)
- 41 . 吉澤智也 『記憶の経験値として生きるソフト・パワーの展開—21世紀のパクス・モンゴリカを求めて—』(日本国際情報学会誌 2巻1号 p.31-33、2017)
- 42 . 四日市康博 『ユーラシア・海域世界の東西交流におけるモンゴル・インパクト』(岩波書店 岩波講座世界歴史 10「モンゴル帝国と海域世界—12～14世紀」 p.40-76、2023)

参考文献 -6

【Web: 計8件】

- 1 . 趙阮 『14世紀におけるモンゴル帝国の食文化の高麗への流入と変化 』 (https://www.aisf.or.jp/sgra/wp-content/uploads/2017/03/9.%ef%bc%bbJ%ef%bc%bdtranslation_Kokushi2_Summary_ChoWon%ef%bc%88%e8%b6%99%e9%98%ae%ef%bc%89.pdf) 最終閲覧日:2024.12.1
- 2 . National PR-centre 『キャラバンサライラバト-マリク』 (<https://uzbekistan.travel/ja/o/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%83%90%E3%83%88-%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%AF/>) 最終閲覧日:2024.11.19
- 3 . World Public Economy Organaization 『シルクロード』 (<https://wpeo.ngo/ja/silk-road/>) 最終閲覧日:2024.11.19
- 4 . Wikipedia 『タルタルステーキ』 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%82%B9%E3%83%86%E3%83%BC%E3%82%AD>) 最終閲覧日:2024.12.1
- 5 . Wikipedia 『ティムール帝国の地図』 (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Timurid_Empire_Map.png#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Timurid_Empire_Map.png) 最終閲覧日:2024.12.1
- 6 . Wikipedia 『中国の陶磁器』 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/>) 最終閲覧日:2024.09.09
- 7 . タビノト 『観光とツーリズムの違いとは』 (https://tabinoto.jp/column/article/00131493#google_vignette) 最終閲覧日:2024.11.15
- 8 . 風の旅行社 『河西回廊 西安とシルクロード石窟寺院14日間』 (<https://www.kaze-travel.co.jp/sr-sp-gs-01.html>) 最終閲覧日:2024.11.19

年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	2024/4/13	・自己紹介 ・今年度テーマ方向性			・春学期スケジュール確定 ・参考文献) モンゴル帝国と長いその後	
2	2024/4/20	・参考資料を読んだの問題意識発表(1)	杉、二本柳、佐々木	モンゴル帝国と長いその後	・メンバー確定	杉
3	2024/4/27	・ゼミ長・副ゼミ長確定 ・問題意識発表(2)	菅沼、阿達、小柳、 高、禹	モンゴル帝国と長いその後	・連絡用Classroom作成(須貝) ・共同作業用Google Drive設定(杉) ・過去資料共有(杉)	須貝
4	2024/5/11	・問題意識発表(3)	山中	モンゴル帝国と長いその後	・研究計画発表準備開始(ゼミ長・副ゼミ長)	小柳
5	2024/5/18	・問題意識発表(4) ・研究計画発表へ向けたスケジュール共有	須貝 二本柳	モンゴル帝国と長いその後	・役割分担確定	二本柳
6	2024/5/25	・問題意識集約 ・テーマ案検討	ディスカッション			佐々木
7	2024/6/1	・テーマ案確定 ・フィールドワーク案確定 ・発表資料骨子検討	〃			高
8	2024/6/8	・研究計画発表資料確定(最終調整) ・発表リハーサル	〃	・大使館訪問調整 ・研究者インタビュー調整	・発表役割&予演日程確定	倉元
9	2024/6/15	・研究計画発表				佐々木
10	2024/6/22	・中間発表準備	ディスカッション	個人テーマ研究報告	大使館訪問・研究者インタビュー調整	阿達
11	2024/6/29	・中間発表準備	杉、倉元、	〃	〃	菅沼
12	2024/7/6	・中間発表準備	菅沼	〃	〃	禹
13	2024/7/13	・中間発表準備	山中、佐々木 二本柳、高	〃	〃	山中
14	2024/7/20	・中間発表準備	阿達、禹	〃	〃	須貝
15	2024/7/27	・中間発表準備	須貝、小柳	〃	〃	小柳
16	2024/8/29-30	・合宿・中間発表				二本柳

年間スケジュール 秋学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	2024/9/21	・ 自己紹介 ・ 春学期成果共有			・ 秋学期スケジュール確定 ・ 最終メンバー確定	
2	2024/9/28	・ 追加メンバー問題意識発表				
3	2024/10/5	・ 追加メンバー問題意識発表				
4	2024/10/12	・ 問題意識集約				
5	2024/10/26	・ 問題意識集約				
6	2024/11/2	・ 発表資料骨子検討				
7	2024/11/9	・ 発表資料骨子確定				
8	2024/11/16	・ 発表資料準備 ・ 論文準備				
9	2024/11/23	・ 発表資料準備 ・ 論文準備				
10	2024/11/30	・ 発表資料準備 ・ 論文準備				
11	2024/12/7	・ 発表資料準備（最終調整） ・ 論文準備（最終調整）			・ 発表役割&予演日程確定	
12	2024/12/14	・ Active Learning発表祭				
13	2024/12/21	・ 最終発表 ・ 年内論文提出				
14	2024/1/11	・ 最終調整				
15	2024/1/18	・ 最終調整				
16	2024/1/25	・ 論文最終提出16:00 ・ 懇親会17:00～				

THANK YOU

